

大谷山 22 号墳、天王塚古墳

- 特別史跡岩橋千塚古墳群追加指定に伴う発掘調査報告書 -

2016 年 3 月

和歌山県教育委員会



1. 大谷山 22号墳3 トレンチ全景 (東から)



2. 大谷山 22号墳3 トレンチ樹立埴輪列 (北から)



3. 天王塚古墳墳丘全景 (前方部・西から)



4. 天王塚古墳1トレンチ1段目断割り状況 (東から)

序 文

紀ノ川河口部に位置する和歌山平野は、古代より紀伊国の中心地であり、天然の良港にも恵まれた交通の要衝地でありました。水運により大和と、海上航路で九州や朝鮮半島とも結ばれ、それを裏付けるように多数の朝鮮半島製の考古遺物や関連遺跡が発見されています。

こうした背景の下にある古墳時代の中心的な遺跡である岩橋千塚古墳群は、和歌山市東部の標高 150m前後の岩橋山塊周辺に 4 世紀末頃から 7 世紀代に 800 基以上の古墳が築かれた国内最大規模の群集墳です。

その中枢部は昭和 6 年に国史跡、昭和 27 年に国特別史跡に指定され、現在は約 61 万㎡の中に 430 基を超す古墳が保存されています。また、昭和 46 年には特別史跡地を中心として「和歌山県立紀伊風土記の丘」が開園し、年間 20 万人以上の人々が訪れています。

古墳群の中には、石柵や石梁をもつ岩橋型石室と呼ばれる特異な構造の横穴式石室が多数みられます。大正 7 年の第一期調査以来、数次の調査が実施され、埴輪類など多種多様な遺物が出土し、学術的価値が高く評価されています。

和歌山県教育委員会では、過去に数回の追加指定と土地の公有化を図り、特別史跡の範囲の拡大に努めてまいりましたが、今回、古墳群の中でも最大規模の天王塚古墳と前方部が未指定となっている大谷山 22 号墳を追加指定することを目指して、平成 26 年度と 27 年度に発掘調査を実施しました。

本書は、その成果を報告書としてとりまとめたもので、古墳群を理解する新たな資料として、広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査にあたり、格別のご配慮を賜りました土地所有者をはじめとする関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。

平成 28 年 3 月 31 日

和歌山県教育委員会
教育長 宮 下 和 己

例 言

- 1 本書は特別史跡岩橋千塚古墳群追加指定に伴い和歌山県教育委員会が実施した大谷山 22 号墳、天王塚古墳の発掘調査報告書である。
- 2 当事業の一部は、文化庁国宝重要文化財等保存整備費補助金を得て実施した。大谷山 22 号墳については、平成 27 年 1 月 23 日～同年 3 月 30 日まで発掘調査を、平成 27 年 3 月 4 日～同年 3 月 27 日、同年 5 月 7 日～同年 7 月 22 日まで出土遺物等整理を行い、天王塚古墳については、平成 27 年 7 月 28 日～10 月 23 日まで発掘調査、平成 27 年 11 月 4 日～同年 11 月 17 日まで出土遺物等整理を行った。また、業務の一部は特別史跡岩橋千塚古墳群追加指定に係る大谷山 22 号墳及び天王塚山古墳発掘調査支援業務として、公益財団法人和歌山県文化財センターへ委託して実施した。

- 3 発掘調査及び出土遺物整理に係る体制は下記のとおりである。

和歌山県教育委員会

教育長 西下 博通（平成 26 年度） 宮下 和己（平成 27 年度～）
生涯学習局長 楠 義隆

文化遺産課

文化遺産課長 川端 真理（平成 26 年度） 水上 勇人（平成 27 年度）
副課長 松本 幸久（平成 26 年度） 坂口 真史（平成 27 年度）
課長補佐兼調査班長 黒石 哲夫
主査 佐々木 宏治（平成 26 年度） 萩野谷 正宏（平成 26 年度）
高橋 智也（平成 27 年度） 丹野 拓（平成 27 年度）
副主査 田中 元浩 技師 上地 舞

- 4 支援業務を委託した公益財団法人和歌山県文化財センターの体制は下記のとおりである。
理事長 工楽 善通（平成 26 年度～平成 27 年 6 月） 櫻井 敏雄（平成 27 年 6 月～）
専務理事 里森 修
事務局長（事務取扱管理課長）嶋田 文紀（平成 26 年度） 米田 良博（平成 27 年度）
埋蔵文化財課長 井石 好裕（平成 26 年度） 土井 孝之（平成 27 年度）
技師 山本 光俊
- 5 当事業は、特別史跡岩橋千塚古墳群保存整備検討委員会の指導を得ながら実施した。整備検討委員の構成は下記のとおりである。

整備検討委員

和田 晴吾 兵庫県立考古博物館館長
松木 武彦 国立歴史民俗博物館教授
菅谷 文則 奈良県立橿原考古学研究所長
増淵 徹 京都橋大学教授
小野 健吉 独立行政法人奈良文化財研究所副所長

- 6 本書の執筆は、第1章、第4章を田中、第2章を山本、第3章を上地、第5章を黒石が行った。また、本書の編集は文化遺産課調査班が行った。
- 7 発掘調査及び出土遺物整理にあたり下記の方々と機関からご指導・ご協力を賜った。
文化庁、和歌山市教育委員会、岩橋自治会、鳴神団地自治会、下和佐自治会、吉礼自治会、西自治会、青柳泰介、犬木 努、大木 要、河内一浩、木下 亘、小賀直樹、清家 章、富永里菜、中司照世、中村貞史、藤本清二郎、藤藪勝則、本多元成、前田敬彦、山本高照（個人名敬称略・五十音順）
- 8 発掘調査及び出土遺物整理で作成した図面・写真並びに台帳等の記録資料及び出土遺物は和歌山県教育委員会が保管している。

凡 例

- 1 本報告書で用いた座標は、平面直角座標系第IV系（世界測地系）にもとづき、mを単位として表記した。また、図示した北方位は座標北を示す。
- 2 標高は、東京湾平均海面（T.P.）による日本水準原点の数値を基準としている。
- 3 調査の土層記録の土色及び出土遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、小山正忠・竹原秀雄著『新版標準土色帖』にもとづく。
- 4 本書に掲載した遺構図面の縮尺は1/80、1/30であり、遺物図面の縮尺は1/4、1/2である。
- 5 本文中の遺物番号は、遺物写真図版の遺物番号と一致する。
- 6 天王塚古墳については、周知の埋蔵文化財包蔵地名として「天王塚山古墳」であったが、一般的に天王塚古墳と周知されているため、平成28年2月1日付け文第01250005号の（2）で「天王塚古墳」へ名称を変更した。
- 7 本書の主な参考文献は以下のとおりである。
関西大学考古学研究室編1967『岩橋千塚』和歌山市教育委員会
和歌山県紀伊風土記の丘2011『大王の埴輪・紀氏の埴輪—今城塚と岩橋千塚—』
和歌山県教育委員会2015『特別史跡岩橋千塚古墳群発掘調査・保存整備事業報告書3—大日山35号墳・前山A13号墳・前山A58号墳発掘調査報告書—』

本文目次

巻頭写真

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 大谷山22号墳の調査成果	7
第3節 調査の目的と方法	7
第1節 調査成果	10
第2節 出土遺物	18
第3節 まとめ	32
第4章 天王塚古墳の調査成果	35
第1節 調査の目的と方法	35
第2節 調査成果	39
第3節 出土遺物	46
第4節 まとめ	46
第5章 総括	49

写真図版

報告書抄録

挿 図 写 真 目 次

<p>第1図 調査対象範囲と特別史跡指定範囲 …………… 1</p> <p>写真1 大谷山22号墳埴輪検出作業 …… 2</p> <p>写真2 大谷山22号墳現地説明会 …… 2</p> <p>写真3 天王塚古墳伐採作業 …… 2</p> <p>写真4 天王塚古墳発掘作業 …… 3</p> <p>写真5 天王塚古墳現地説明会 …… 3</p> <p>写真6 出土遺物整理作業 …… 3</p> <p>第2図 特別史跡岩橋千塚古墳群周辺の遺跡分布図 …… 4</p> <p>第3図 特別史跡岩橋千塚古墳群主要古墳の位置 …… 6</p> <p>第4図 大谷山22号墳埴丘測量図 (S=1/800) …… 8</p> <p>第5図 大谷山22号墳発掘調査トレンチ配置図 (S=1/500) …… 9</p> <p>第6図 大谷山22号墳1トレンチ平面図 (S=1/30、1/80) …… 11</p> <p>第7図 大谷山22号墳1トレンチ土層断面図 (S=1/80) …… 12</p> <p>第8図 大谷山22号墳2トレンチ土層断面図 (S=1/80) …… 14</p> <p>第9図 大谷山22号墳2トレンチ平面図 (S=1/80) …… 16</p> <p>第10図 大谷山22号墳3トレンチ土層断面図 (S=1/80) …… 17</p> <p>第11図 大谷山22号墳3トレンチ平面図 (S=1/30、1/80) …… 20</p> <p>第12図 IV群系円筒埴輪① (S=1/4) …… 21</p> <p>第13図 IV群系円筒埴輪② (S=1/4) …… 22</p> <p>第14図 V群系円筒埴輪① (S=1/4) …… 23</p>	<p>第15図 V群系円筒埴輪② (S=1/4) …… 24</p> <p>第16図 IV群系朝顔形埴輪 (S=1/4) …… 25</p> <p>第17図 器財形埴輪(盾形埴輪)①(S=1/4) …………… 26</p> <p>第18図 器財形埴輪(盾形埴輪)②(S=1/4) …………… 27</p> <p>第19図 器財形埴輪(蓋形埴輪)③(S=1/4) …………… 28</p> <p>第20図 器財形埴輪(蓋形埴輪)④(S=1/4) …………… 29</p> <p>第21図 人物形埴輪、動物形埴輪、不明埴輪、土器類 (S=1/4、1/8) …… 31</p> <p>第22図 大谷山22号墳埴丘復元図 (S=1/500) …… 34</p> <p>第23図 天王塚古墳埴丘測量図(S=1/600) …………… 36</p> <p>第24図 天王塚古墳埴丘エレベーション及び位置図 (S=1/1000) …… 37</p> <p>第25図 天王塚古墳トレンチ配置図及び調査グリッド (S=1/600) …… 38</p> <p>第26図 天王塚古墳1トレンチ平面図、立面図及び断面図 (S=1/80) …… 41</p> <p>第27図 天王塚古墳4トレンチ平面図及び断面図 (S=1/80) …… 42</p> <p>第28図 天王塚古墳2トレンチ平面図及び断面図 (S=1/80) …… 43</p> <p>第29図 天王塚古墳3トレンチ平面図及び断面図 (S=1/80) …… 45</p> <p>第30図 出土遺物 (S=1/2、S=1/4) …… 46</p> <p>第31図 天王塚古墳埴丘復元図 (S=600) …………… 48</p>
---	--

写真図版目次

巻頭写真1 (大谷山 22 号墳)

1. 大谷山 22 号墳 3 トレンチ全景 (東から)
2. 大谷山 22 号墳 3 トレンチ樹立墳輪列 (北から)

巻頭写真 2 (天王塚古墳)

1. 天王塚古墳墳丘全景 (前方面・西から)
2. 天王塚古墳 1 トレンチ 1 段目断割り状況 (東から)

写真図版 1 (大谷山 22 号墳)

1. 大谷山 22 号墳を望む (北から)
2. 後円部墳丘 (北から)
3. 前方面墳丘 (西から)

写真図版 2 (大谷山 22 号墳)

1. 1 トレンチ完掘状況 (断割り後)
2. 1 トレンチ基壇裾転落墳輪検出状況 (西から)
3. 1 トレンチ南壁土層断面 (北から)
4. 1 トレンチ基壇テラス上面樹立墳輪列 (東から)
5. 1 トレンチトレンチ西側岩盤層検出状況 (西から)

写真図版 3 (大谷山 22 号墳)

1. 2 トレンチ南半全景 (北から)
2. 2 トレンチ北半全景 (北から)
3. 2 トレンチトレンチ設定前状況 (南から)
4. 2 トレンチ樹立墳輪列 (東から)
5. 2 トレンチ中央東壁土層断面及び墳丘内列石検出状況 (西から)
6. 2 トレンチ北側東壁土層断面 (西から)

写真図版 4 (大谷山 22 号墳)

1. 3 トレンチ断割り後完掘状況 (東から)
2. 3 トレンチ断割り後完掘状況 (北から)
3. 3 トレンチ基壇テラス上樹立墳輪列 (東から)
4. 3 トレンチ設定前状況 (南から)
5. 3 トレンチ北側南壁土層断面 (北から)
6. 3 トレンチ中央南壁土層断面 (北から)
7. 3 トレンチ南側南壁土層断面 (北から)

写真図版 5 (大谷山 22 号墳)

- 1~4. IV 群系円筒墳輪
5. V 群系円筒墳輪
6. V 群系円筒墳輪口縁部ヘラ記号
7. V 群系円筒墳輪 (断続ナデ技法 B)
8. 形象墳輪

写真図版 6 (大谷山 22 号墳)

- 1・2. 朝顔形墳輪 3~8. 盾形墳輪

写真図版 7 (大谷山 22 号墳)

- 1~6. 蓋形墳輪
7. 不明墳輪 8. 須石器

写真図版 8 (天王塚古墳)

1. 天王塚古墳から大谷山 22 号墳を望む (前方面・東から)
2. 伐採前状況 (後円部・西から)
3. 墳丘全景 (前方面・西から)

写真図版 9 (天王塚古墳)

1. 1 トレンチ完掘状況 (断割り後)
2. 1 トレンチ第 2 段斜面検出状況 (東から)
3. 1 トレンチ第 2 段斜面土層断面 (北東から)
4. 1 トレンチ墳丘裾土層断面 (北東から)
5. 1 トレンチ第 1 段斜面中岩盤層検出状況 (北東から)

写真図版 10 (天王塚古墳)

1. 1 トレンチ第 1 段斜面断割り状況 (東から)
2. 1 トレンチ第 2 段斜面断割り状況 (東から)
3. 1 トレンチ墳丘裾埋設管検出状況 (北東から)
4. 2 トレンチ調査前状況 (西から)
5. 2 トレンチ第 1 段平坦面検出状況 (西から)
6. 2 トレンチ墳丘検出状況 (西から)

写真図版 11 (天王塚古墳)

1. 2 トレンチ断割り後完掘状況 (西から)
2. 2 トレンチ第 1 段斜面土層断面 (南から)
3. 2 トレンチ墳丘裾攪乱 (南から)
4. 2 トレンチ第 2 段断割り状況 (西から)
5. 2 トレンチ第 2 段断割り状況 (南西から)

写真図版 12 (天王塚古墳)

1. 3 トレンチ断割り後完掘状況 (南から)
2. 3 トレンチ墳丘裾遺物出土状況 (南から)
3. 3 トレンチ攪乱 (東から)
4. 3 トレンチ第 2 段断割り状況 (西から)
5. 3 トレンチ墳丘裾断割り状況 (南西から)

写真図版 13 (天王塚古墳)

1. 2 トレンチ及び 4 トレンチ完掘状況 (西から)
2. 4 トレンチ完掘状況 (西から)
3. 4 トレンチ墳丘裾検出状況 (北から)
4. 4 トレンチ墳丘裾土層断面 (北から)
5. 天王塚古墳出土遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査の経緯

岩橋千塚古墳群は、和歌山市の岩橋山塊周辺に存在する約848基からなる国内最大規模の群集墳である。そのうち総面積608,801㎡の範囲については、国の特別史跡に指定され紀伊風土記の丘公園として整備と活用がなされているが、古墳群の多くは指定地外に存在する。

特に、古墳群内で首長墓とされる8基の大型の古墳のうち、特別史跡に指定されているのは大日山35号墳と大谷山22号墳の2基のみである。こうした中、岩橋千塚古墳群の周辺では大規模な墓地区画開発や宅地造成が計画され、未指定地の保存が危ぶまれた。また、天王塚古墳の墳丘は竹林に覆われ、墳丘の一部が損傷するなど古墳の保存についても憂慮されており、追加指定による保護と公有地化による整備が急務とされた。

こうした状況をうけ、和歌山県教育委員会では、平成26年度より、未指定の大型古墳において範囲確認調査や測量調査を実施し、これらの特別史跡への追加指定、史跡地の公有地化及び史跡整備を目的とした岩橋千塚古墳群追加指定事業を開始した。第1期事業として、岩橋千塚古墳群内でも最大規模の前方後円墳とされる天王塚古墳と一部が未指定であった大谷山22号墳を対象として



第1図 調査対象範囲と特別史跡指定範囲

事業を行うこととした。

事業にあたっては、特別史跡への追加指定、史跡地の公有地化を生徒学習局文化遺産課で、その後の史跡整備を県立紀伊風土記の丘で実施することとしている。本報告書では、平成26年度に実施した大谷山22号墳の測量・発掘調査及び平成27年度に実施した天王塚古墳の測量・発掘調査の内容を収録した。

第2節 調査の経過

(1) 平成26年度

平成26年度は、大谷山22号墳の範囲確認調査並びに出土遺物整理及び天王塚古墳の調査準備作業を実施した。

大谷山22号墳の範囲確認調査は測量調査（填丘補足測量、基準点測量、水準測量）及び発掘調査を行い、出土遺物整理は出土遺物の洗浄、注記、内容確認を行った。測量調査は、株式会社南紀航測センターに委託して実施した。また、その他の作業は、公益財団法人和歌山県文化財センターに「岩橋千塚古墳群追加指定に伴う大谷山22号墳及び天王塚古墳発掘調査等支援業務」（以下、「支援業務」とする。）として委託し、調査支援を受けながら文化遺産課が直接実施した。

範囲確認調査は、平成26年8月19日から平成27年3月13日までの期間で測量調査を、平成27年1月23日から同年3月30日までの期間で1～3トレンチを設定して約59㎡の発掘調査を行った。現地調査は、平成26年度特別史跡岩橋千塚古墳群保存整備委員会（以下、「整備委員会」とする。）の指導助言を受けながら実施し、整備委員会は平成27年3月8日、同年3月13日に開催した。

調査成果の公開のため現地説明会を平成27年3月14日に開催し、60名が参加した。発掘調査に併行し、平成27年3月4日から同年3月27日の期間で出土遺物等の洗浄を行った。

また、天王塚古墳の調査準備作業は、測量



写真1 大谷山22号墳植検出作業



写真2 大谷山22号墳現地説明会



写真3 天王塚古墳伐採作業

調査のための伐採作業と分布調査を行った。伐採作業については、支援業務として委託し、調査支援を受けながら文化遺産課が直接実施した。

調査準備作業は、平成27年1月9日から同年3月5日までの期間で行った。

(2) 平成27年度

平成27年度は、大谷山22号墳の出土遺物整理及び天王塚古墳の調査準備作業、範囲確認調査並びに出土遺物整理を実施した。

大谷山22号墳の出土遺物整理は、出土遺物の注記、接合、復元、実測、トレース、写真撮影と調査図面のトレースを行った。出土遺物整理は、公益財団法人和歌山県文化財センターに第2次支援業務として委託し、調査支援を受けながら文化遺産課が直接実施した。

出土遺物整理は、平成27年5月7日から同年7月22日まで期間で実施した。

天王塚古墳の範囲確認調査は、測量調査(墳丘測量、基準点測量、水準測量)及び発掘調査を行った。また、出土遺物整理は、出土遺物の洗浄、注記、内容確認、接合、復元、実測、トレース、写真撮影と調査図面のトレースを行った。測量調査は、株式会社南紀航測センターに委託して実施した。その他の作業は、公益財団法人和歌山県文化財センターに第2次支援業務として委託し、調査支援を受けながら文化遺産課が直接実施した。

範囲確認調査は、平成27年7月14日から同年10月23日までの期間で測量調査を行い、平成27年7月28日から同年10月23日までの期間で1～4トレンチを設定して約60㎡の発掘調査を行った。現地調査は、平成27年整備委員会の指導助言を受けながら実施し、委員会は平成27年8月29日、同年9月4日、同年9月28日に開催した。また、調査成果の公開のため現地説明会を平成27年10月17日に開催し、251名が参加した。発掘調査後、平成27年11月4日から同年11月17日の期間で出土遺物整理を行った。

上記作業完了後、原稿執筆を行い、平成28年3月31日に報告書を刊行した。



写真4 天王塚古墳発掘作業



写真5 天王塚古墳現地説明会



写真6 出土遺物整理作業

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

岩橋千塚古墳群周辺には中央構造線が東西に横断し、これによって北側の西南日本内帯、南側の西南日本外帯に分けられる。この中央構造線の南に紀ノ川が西流しており、和歌山平野を北岸と南岸に二分している。紀ノ川は、奈良県と三重県の県境に位置する大台ヶ原を源流とし、紀伊水道に注ぐ延長136kmの一級河川であり、運ばれてきた土砂により和歌山平野が形成されている。北岸には内帯に属する和泉山脈があり、領家変成帯の西南端にあたる。和泉山脈は堆積岩である礫岩・砂岩・泥岩の互層をなす和泉層群で構成される。南岸には外帯に属する龍門山脈があり、変成岩である結晶片岩を主体とする三波川変成帯（長瀬変成帯）である。龍門山脈は、結晶片岩中に貫入した蛇紋岩からなる龍門山（756m）が主峰となり、西側へ標高を減じながら、途中紀ノ川支流に分断されながら、岩橋山塊まで続く。岩橋山塊は結晶片岩類で構成される山塊で、東から天王塚山（155m）・大日山（142m）と連なり、北端の花山（77m）や西端の福飯ヶ峯（101m）へと小山塊が続く。この岩橋山塊の尾根や斜面に岩橋千塚古墳群が存在する。

第2節 歴史的環境

（1）周辺の歴史的環境

縄文時代には、岩橋山塊裾部で鳴神貝塚、吉礼貝塚、網宜貝塚、岡崎縄文遺跡などが確認され、鳴神貝塚や隣接する鳴神IV遺跡から抜歯された女性を埋葬した土坑墓などが検出された。

弥生時代には、紀ノ川南岸では太田・黒田遺跡、紀ノ川北岸では西田井遺跡、北田井遺跡、宇田森遺跡、川辺遺跡、吉田遺跡などの集落が立地する。中期後葉～後期前半には太田・黒田遺跡など平野部の集落が激減し、岩橋山塊の天王塚山遺跡や滝ヶ峯遺跡などの高地性集落が出現する。後期中葉以降、岩橋山塊南西部の井辺遺跡、神前遺跡のほか、紀ノ川北岸の田屋遺跡、西田井遺跡、宇田森遺跡など平野部に集落が展開しており、その多くは古墳時代前期に継続する。紀ノ川下流域では銅鐸6口が発見されている。

古墳時代には、岩橋山塊西側に鳴神II～VI遺跡、音浦遺跡、大日山I遺跡など古墳時代の集落が立地する。これらの集落からは、滑石製製造品などの祭祀遺物や、韓式系土器が多く出土する。この他、



第2図 特別史跡岩橋千塚古墳群周辺の遺跡分布図

友田町遺跡、秋月遺跡などで堅穴住居や掘立柱建物が検出されている。紀ノ川北岸では古墳時代中期の大型倉庫群が発見された鳴滝遺跡や、初期須恵器が多数出土した楠見遺跡、埴輪窯が検出された平井遺跡が知られている。

奈良時代以降には、紀伊国一宮の日前・国懸神宮が造営され、その周辺には条里地割が残る。秋月遺跡では奈良～室町時代の掘立柱建物が検出され、神宮に関連する大規模集落と考えられる。太田・黒田遺跡では奈良時代的大型井戸から斎串や和同開珎が出土している。室町時代の遺跡としては太田城跡があり、16世紀の堀跡が調査されている。この近くには太田城水攻め堤跡が残る。

(2) 岩橋千塚古墳群周辺の古墳

紀ノ川南岸では、秋月遺跡、鳴神遺跡などでは中期～後期の円墳・方墳が造られる。前期には、県内最古の前方後円墳と考えられる秋月1号墳が造営される。

岩橋山塊東側の明楽山(鳩羽山)では、東国山古墳群、モント塚古墳群、明楽古墳群、小倉神社古墳群、奥山田古墳群、具東壺古墳群、七ツ塚古墳群、寺山古墳群など後期の古墳群が形成される。東国山1号墳では未盗掘の堅穴式石室が調査され、男女2体の人骨、多量の遺物が発見された。小倉1・8号墳は横穴式石室を持つ古墳であり、特に8号墳は石棚をもつ岩橋型横穴式石室である。具東壺1～3号墳は7世紀の横穴式石室を持つ円墳である。七ツ塚古墳群は主に7世紀代に造営された古墳である。寺山古墳群は7世紀の方墳3基を含む約20基からなる古墳群である。

岩橋山塊南東側の貴志川流域の平野部では、古墳時代中期～後期にかけて円墳である籬子塚古墳、丸山古墳、三味塚古墳や前方後円墳である双子三味塚古墳、平池1号墳が造営される。丸山古墳は箱式石棺から鉄鉚・鉄釧を含む鉄製品、玉類、琴柱形石製品などが発見されている。平池1号墳は、くびれ部に陸橋をもつ6世紀前半の前方後円墳(墳長31.5m)であることが判明している。紀ノ川と貴志川の合流地点には船戸山古墳群、船戸箱山古墳が形成される。船戸山1～3・6号墳は岩橋型横穴式石室を持つ古墳で、このうち2・3号墳は石棚を有する。船戸箱山古墳は6世紀中頃～後半に構築された円墳があり、墳丘には埴輪列が確認されている。

岩橋山塊南側から海南市にかけても数多くの古墳が造営されている。伊太郎曾神社1号墳、城ノ前1号墳、小野田古墳は、石棚・石梁をもつ6世紀後半～7世紀前半の岩橋型横穴式石室である。室山古墳群は岩橋型横穴式石室が主体の6世紀中葉～7世紀前半の古墳群で、このうち1・2号墳は石棚・石梁をもつ横穴式石室をもつ。山崎山古墳群のうち1号墳は、6世紀末～7世紀初頭の石棚をもつ横穴式石室が確認されている。また、山崎山5号墳は造出部を有する墳長45mの5世紀前半の前方後円墳である。

紀ノ川北岸では、釜山古墳群の車駕之古址古墳は、段築、盾形周濠、造出を備えた5世紀後半の前方後円墳(墳長86m)と判明し、金製勾玉などが出土している。晒山古墳群では、5世紀前半の晒山1号墳、5世紀後半の大谷古墳(墳長67m)6世紀前半の晒山4号墳・10号墳が確認されている。大谷古墳は、組合式家形石棺を内部主体に持つ前方後円墳であり、鉄製馬冑・馬甲などの豊富な遺物が出土している。雨ヶ谷古墳群では、5世紀後半～6世紀前半の古墳が確認された。鳴滝古墳群では、6～7世紀の古墳が確認され、鳴滝1号墳は石棚を有する岩橋型横穴式石室を持つ。園部円山古墳からは金銅装大刀や馬具が出土している。六十谷1・2号墳では、4世紀後半から5世紀前半の埴輪が出土しており、2号墳では埴輪列・葺石も確認されている。八王子山古墳群は、前方後円墳3基を含む約20基の古墳群である。

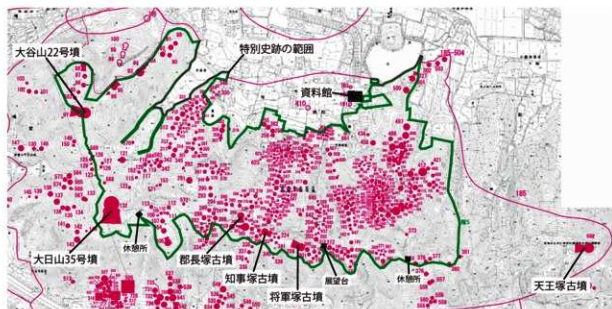
(3) 岩橋千塚古墳群

岩橋千塚古墳群は明治時代以降複数の調査が行われてきており、古墳群の範囲についてはそのつど認識が変化してきた。現在『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』では、岩橋山塊西寄りの古墳が群在する前山A・B・大日山・大谷山・井辺地区に寺内地区の一部と天王塚古墳を含めた範囲を岩橋千塚古墳群の範囲としており、古墳の総数は472基である。これに隣接する古墳群として花山古墳群と井辺前山古墳群、寺内古墳群、山東古墳群が存在しており、これらを合わせて岩橋山塊周辺の古墳群を把握している。

広く認識されている岩橋千塚古墳群の範囲は、地形区分から花山(84基)・大谷山(23基)・大日山(53基)・前山A(152基)・前山B(290基)・和佐(14基)・井辺前山(88基)・井辺(28基)・寺内(88基)・山東(28基)の10地区(合計848基)に区分できる。430基を越す古墳が密集する範囲が特別史跡岩橋千塚古墳群として指定されている。

古墳の築造は4世紀末～5世紀初頭に始まり、この時期の前方後円墳は、粘土椀を主体部とする花山8号墳や花山44号墳など花山地区に集中している。5世紀末から6世紀初頭の花山6号墳まで花山地区が古墳群の中心であった。和歌山平野に面し、花山の南方に連なる大谷山地区・大日山地区・井辺前山地区にはそれぞれ6世紀前半の前方後円墳である大谷山22号墳、大日山35号墳、井辺八幡山古墳を中心に群集墳が広がる。6世紀代には紀ノ川に面した前山北斜面に群集墳築造の中心があり、古墳群が形成される。6世紀後半以降の首長墓は天王塚古墳、石室平面積が最大となる寺内57号墳、終末期の方墳である井辺1号墳と続き、7世紀後半には古墳の築造が終息する。

岩橋千塚古墳群の発掘調査は明治39年(1906)に始まり、昭和6年(1931)には史跡に指定され、保護されている。全国的にも早い段階で調査・保存が進められ、昭和27年(1952)の特別史跡指定に至り、昭和46年(1971)8月には紀伊風土記の丘が開園した。特別史跡指定後も断続的に発掘調査が行われ、昭和63年(1988)、平成12年度に特別史跡の追加指定がされている。



第3図 特別史跡岩橋千塚古墳群主要古墳の位置

第3章 大谷山22号墳の調査成果

第1節 調査の目的と方法

(1) 調査の目的

大谷山22号墳は、1966年(昭和41年)に和歌山市教育委員会及び関西大学により測量調査と発掘調査が実施されている。この調査により、本古墳は横穴式石室を埋葬施設とする古墳時代後期の古墳で、墳形は主軸を東西に向けた全長約80mの前方後円墳、南くびれ部には形象埴輪が立て並べられた別区をもち、墳丘裾には盾形に埴輪列がめぐることが明らかとなった。さらに、この調査以降、他地域の古墳に関する調査事例の増加に伴い、大谷山22号墳は盾形の基壇の上に2段築成の墳丘を構築する全長約80m以上、墳長約65mの前方後円墳と想定されるようになった。今調査では、特別史跡への追加指定に向けて、これまで不明確であった墳丘の規模や構造などを明確にすることを目的として、測量調査及び発掘調査を実施した。

(2) 調査の方法

発掘調査に先立ち、測量調査により墳丘測量図を作成した。発掘調査はこの成果をもとに計3箇所を調査区を設定して実施した。トレンチ内の表土、攪乱土及び流出土を除去し、墳丘等の遺構検出を行った。その後、写真撮影及び平面図、立面図並びに断面図等の記録を作成した。写真撮影は、6×7判カラーリバーサルフィルム及びモノクロームネガフィルムを使用した。また適宜、中判デジタルカメラ(4000万画素相当)、APS-Cデジタルカメラ(2000万画素相当)にて撮影を行いJPEG形式及び一部については併せてRAW形式でも保存し、DVD-Rに保存した。図面作成は、平面図及び遺物出土状況平面図、立面図を1/10、土層断面図を1/20で作成した。また、記録作成後、整備委員会の調査指導を得た上で、墳丘の構築方法や構造を確認すべく最小限の範囲での断割り調査を実施している。なお、樹立埴輪の基部については、全て現地保存とした。すべての作業完了後、墳丘の保護のため、不織布シートにより墳丘上面を養生したのち掘削排土により埋戻しを行った。調査記録及び出土遺物は、調査コード「14-01-185-97」(2014年度(平成26年度)-和歌山市-岩橋千塚古墳群-大谷山22号墳)により管理している。

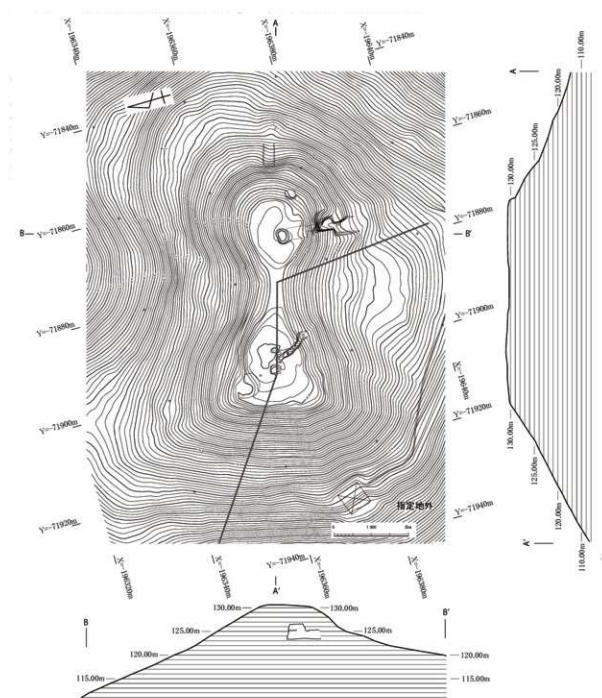
(3) 測量調査の方法

基準点測量は、既に設置されていた3級基準点及び2級基準点をもとにトータルステーションを用いて墳丘周囲に4級基準点を4箇所設置した。墳丘測量は、既設点を利用した地上レーザー測量により実施し、縮尺200分の1、25cmコンターの墳丘測量図を作成した。

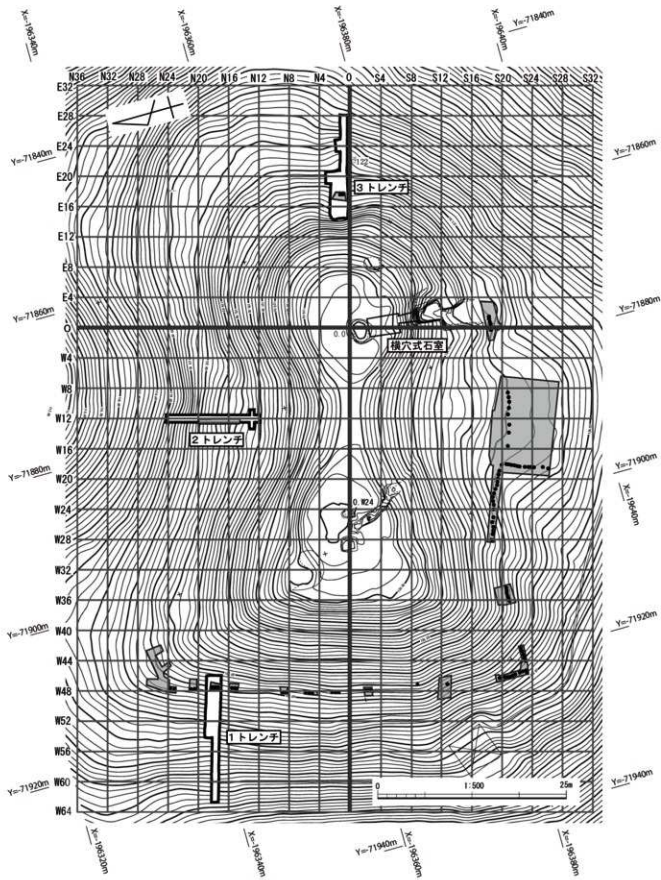
(4) 調査区の設定

調査区を設定するにあたり、後円部中央に任意の中心点(0,0)及び墳丘主軸を設定した。墳丘主軸は前方部中央に木製杭(0,W24)を打設して中心点と結び設定した。この主軸を東西中心軸(EW0)、これと直行して中心点を通る軸を南北中心軸(SN0)として、この2軸を基準とし4m四方のグリッドを設定した。グリッドの四隅のうち中心点に近い隅を地区名として付与した。また、全てのトレ

ンチで4 m四方グリッドをさらに50 cm四方グリッドに細分した。50 cm四方グリッドの名称は、中心点に近い区画から1～64の番号をふり、4 m四方グリッド同様四隅のうち中心点に近い隅を小地区名として付与した。調査区は、後円部（3トレンチ）、北くびれ部（2トレンチ）、前方部（1トレンチ）に各1箇所設定した。設定にあたっては、既往の調査である関西大学の調査トレンチ位置についても確認すべく、重複すると考えられる位置で設定を試みた。なお、前方部の調査区設定にあたっては、主軸の延長上に設定を行ったものの所有者の同意を得ることができず、設定が可能な位置に移動して設定している。



第4図 大谷山22号墳丘測量図 (S=1/800)



□ 今回発掘調査トレンチ ■ 関西大学発掘調査トレンチ ● 関西大学発掘調査検出樹立墳輪
 第5図 大谷山 22号墳発掘調査トレンチ配置図及び調査グリッド(S=1/500)

第2節 調査成果

(1) 測量調査

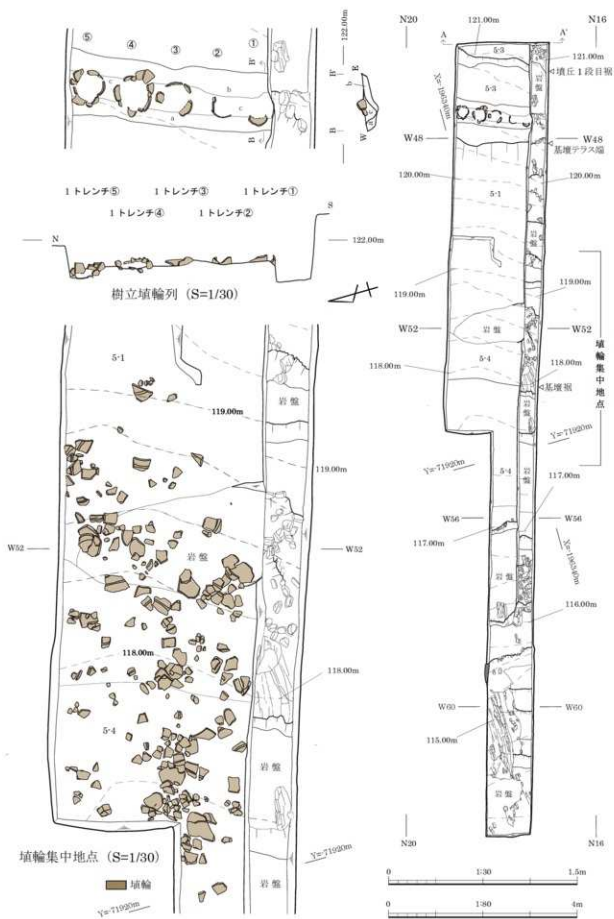
大谷山 22 号墳は、四方から延びる尾根が結節する大谷山山頂（標高約 132m）に位置し、主軸を東西方向に向けた前方後円墳である。主軸は座標北よりおおよそ N-105°-S の方向を示し、後円部径より前方部がやや広がる形状をなす。古墳の外形及び段築は、部分的に傾斜が緩やかとなる箇所が認められるものの、全体として明確に把握することはできない。墳丘南側には、既往の調査で判明しているように方形の平坦面が明瞭に認められた。また、墳丘上には盗掘坑など後世の改変が数ヶ所認められるものの、墳丘の保存状況は極めて良好であると想定された。

(2) 前方部の調査（1 トレンチ）

前方部前端北側にて、墳堀を検出することを目的とし東西方向に設定した幅 1.0～2.0m、長さ 16.7m のトレンチである。トレンチ設定箇所の現状地盤は、東側で標高 122.5m、西側で標高 115.4m と東から西に向かって急激に下がる地形を成す。調査の結果、墳丘裾、基壇テラス、基壇裾を確認し、基壇テラス上面では樹立された埴輪列を検出した。しかし、当初検出できると想定していた関西大学の調査トレンチは、明確に検出することができなかったが、検出した樹立埴輪の数や位置からみて、樹立埴輪南側に位置した可能性がある。墳丘裾は、傾斜変換点と認められたトレンチ東橋から 0.4～0.6m 付近とみられ、標高は約 122.2m である。墳丘裾から続く基壇テラス面の長さは約 1.7m で、その上面の埴輪側では樹立された埴輪列を検出した。基壇裾は、傾斜が変換するトレンチ東端から 7.0m 付近で、標高約 119.2m である。基壇裾以西には、長さ約 2.6m の平坦面が形成されていることが確認された。この基壇裾付近では、基壇テラス面上又は墳丘上から転落したとみられる大量の埴輪が確認されたものの、平坦面上で樹立した埴輪は検出されていない。また、測量調査から平坦面以西にも段築が形成されている可能性があったことから、幅約 1m、長さ 8.4m で西側に向かってトレンチの拡張を行った。拡張部分の掘削を行ったところ、岩盤を検出するにどまり、基壇裾平坦面以西は自然地形であると判断した。

墳丘構築過程を確認するため、トレンチ南壁側にて幅約 0.4m で断割りを行った。その結果、地表下 0.2～0.6m で軟質の岩盤が検出された。土層堆積状況及び遺構の平面検出状況から、前方部は旧表土を掘削し岩盤を墳丘の形状に合わせて削り出したうえで、岩盤のくぼみや墳丘の形状にそって 0.3m 以下の盛土を行って墳丘を構築したとみられる。ただし、墳丘の平面検出状況から、岩盤上にすべて盛土が成されていたのではなく、当初から一部岩盤が露出していた可能性がある。また、トレンチ東側土層断面の観察から墳丘裾側から、盛土は墳丘中心へ向かって積み上げられていることが判明した。

基壇テラス上の樹立埴輪は、掘方の平面検出状況からみて布掘りで設置されている。布掘りの幅は約 0.5m、深さは約 0.4m、埋土は 3 層（a～c 層）に分けられ、a、b 層により掘方東西側面からやや埋めた後、埴輪を据え付け最後に c 層で埋め戻したものとみられる。樹立埴輪の個体数は、全部で 5 個体確認された。トレンチ南側から 1 トレンチ①～⑤と呼称する。①からトレンチ南壁までの間は樹立埴輪は確認できなかった。土層断面からみて、本来は設置されていたものの流出した可能性が高い。各樹立埴輪の法量は、直径は 25～30 cm、残存高は断割り断面からみ



第6図 大谷山22号墳1トレンチ平面図 (S=1/30、1/80)

て10 cm以下と想定され、厚さは②の0.2 cmを除くと約0.5 cm程度である。その中心間隔は0.25～0.3 mと狭く、密に立て並べられていた様相がうかがえる。すべてにおいて突帯やスカシは認められず、色調は明褐色を呈し、胎土には結晶片岩を含む。調整はいずれも摩耗が激しく判然としないが、色調等からみて全て後述するIV群系（紀伊型、環畿内南部型埴輪）とみられる。

（3）くびれ部の調査（2トレンチ）

北側くびれ部にて、くびれの位置を確認することを目的として南北方向に設定したトレンチである。トレンチの幅約1.0m、長さ約12.5mであるが、一部埴輪列確認のため、東西方向へ幅1.4～1.7m、長さ約1.2mの拡張を行った。現状地盤はトレンチ南側で標高約124.9m、トレンチ中央で約122.8mと緩やかに傾斜するが、トレンチ北側の標高は約118.8mと中央から北側に向かっては急激に傾斜する。調査の結果、埴丘裾、平坦面、基壇裾を確認し、平坦面上で樹立された埴輪列を検出した。しかし、関西大学の調査トレンチは確認できず、当地形が急斜面を呈していることから、雨水等により堆積土が流出したため、掘方が不明瞭となったものと推測される。埴丘裾は、傾斜変換点が認められるトレンチ南端から1.8m付近とみられ、標高約124.2mである。埴丘裾から続く平坦面端は約122.9mと緩やかに傾斜する。この平坦面で特筆すべきは点、約5.2mと他のトレンチで見られるテラスに比べ長く、また樹立埴輪の位置も南側くびれ部に比べ埴丘裾側に位置している。さらに、当トレンチでのみ人形埴輪及び動物形埴輪が出土していることである。このことから、この平坦面が造出である可能性は高く、平坦面北端にも本来、埴輪が樹立されていた可能性がある。基壇裾は、傾斜が緩やかとなるトレンチ南端より12.0m付近とみられ、標高は約118.5mである。基壇裾からトレンチ北壁まではほぼ平坦であり、1トレンチ同様、平坦面が形成されていたものとみられる。

また、埴丘構築過程を確認するため、トレンチ東側に幅約0.4mで断割りを行い、現地表面から約1.0m掘削を行った。断割り部分では岩盤は検出できず、盛土が確認されたにとどまり、トレンチ南東隅に岩盤が認められるほかは全て大幅に盛土がなされていることが確認された。おそらく、北側くびれ部は本来北西及び北東から伸びる尾根の谷地部分であったが、古墳の設計に合わせて盛土を積み上げたものと想定される。また、その盛土は極めてしまりが強く、構築方法は埴丘裾から埴丘中心に向かって厚さ0.4m程度のオリーブ褐色と灰色等の土層を互層状に積む方法で、その間には部分的に礫群が認められた。礫群は、埴丘内列石（埴丘内埋設石積施設）である可能性があり、検出状況からみて放射状に配されたものではなく、埴丘に沿った形で四重以上配置されたものと推測される。用いられた石材の形状は大半が扁平で角張ったものである。ただし、埴丘裾付近の列石は他とやや様相を異にし、やや小ぶりで長軸を埴丘側にむけほぼ隙間なく直線状に並べられている。樹立埴輪の残存高からみて、これらも本来埴丘内に埋設されていた可能性が高い。

平坦面上の樹立埴輪は、掘方の平面検出状況からみて布掘りで設置されている。布掘りの幅は約0.4m、深さは現状では不明である。埋土はa層、b層の2つに分けられる。樹立埴輪は全部で5個体確認され、東側から2トレンチ①～⑤と呼称する。樹立埴輪①・②・⑤の中には礫が認められ、とりわけ⑤については埴輪の径と同等の幅をもつ礫が確認された。いずれも埴輪設置時にこれを支えることを意図したものと考えられる。各埴輪の法量は直径25～30cmで、いずれも残存高は10cm程度と想定される。その中心間隔は30cm程度と狭く、1トレンチ同様、密に立て並べられていた様

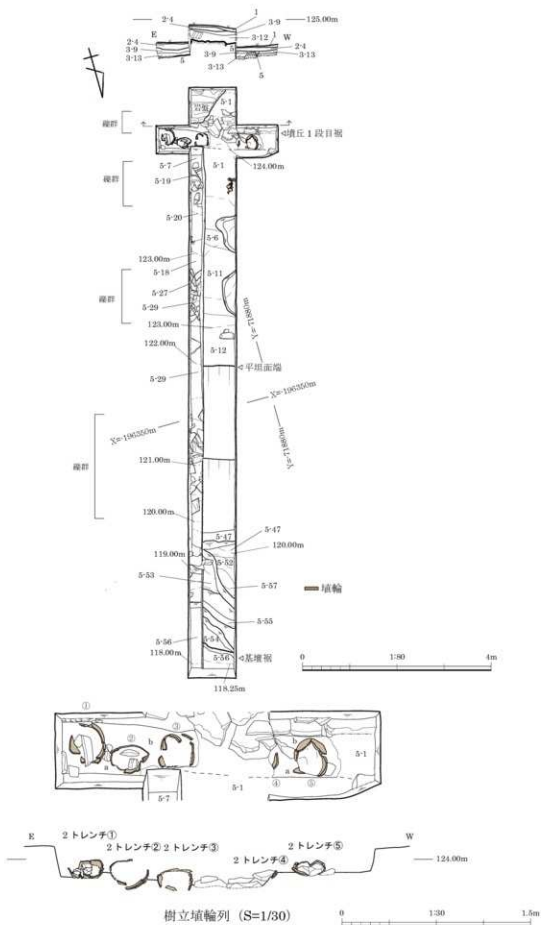
相がうかがえる。おそらく③と④間に1個体、1トレンチ⑤以西に1個体樹立されていたと考えられるが、流失した可能性が高い。また、①は一部突帯が確認されたものの、スカシ孔は確認できなかった。また、黒斑も認められない。樹立填輪2トレンチ①～④はいずれも明褐色を呈し結晶片岩を含む。調整は、いずれも摩耗が激しく判然としないが、②・③にはタテハケが観察でき内面調整はナデである。2トレンチ⑤は、黄褐色を呈し結晶片岩を含む。外面調整は板オサエ、内面調整はナデである。法量及び色調からみて①～④はIV群系とみられ、⑤のみV群系(畿内型)とみられる。

(4) 後円部の調査(3トレンチ)

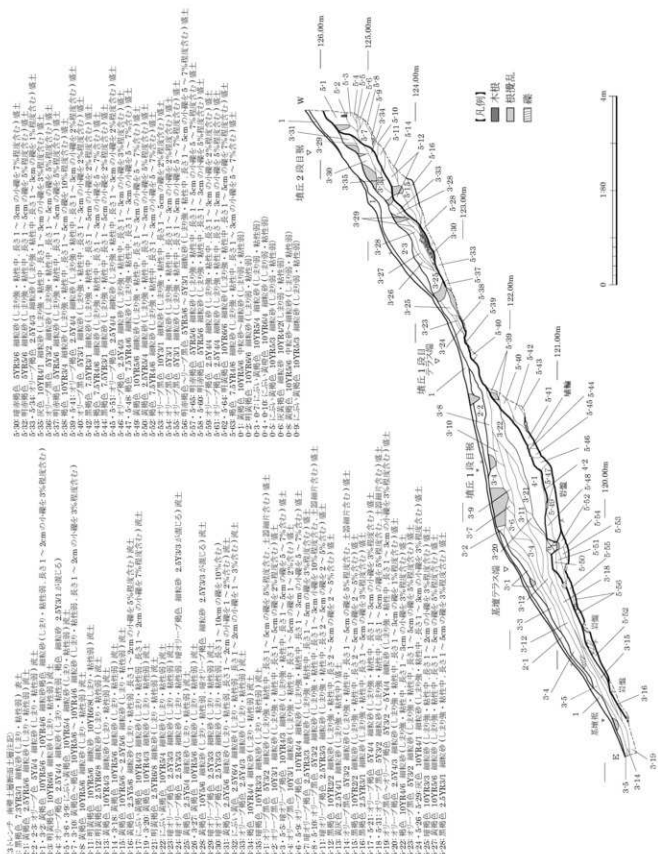
後円部端を検出することを目的として任意の墳丘仮主軸に沿い東西方向に設定したトレンチである。トレンチは方形状を呈する盗掘坑の南側掘方を利用し、幅1.0m、長さ約13.7mで設定した。盗掘坑は幅2.0～2.5m、長さ約5.5m、深さ0.2～1.0mであり、今回の調査以前から墳丘盛土内まで攪乱された状態であった。トレンチ設定位置の現状地盤は、西側で標高126.3m、東側で標高119.3mと西から東に向かって急激に下がる。調査により、墳丘2段目裾、1段目テラス、1段目裾、基壇テラス、基壇裾を確認し、基壇テラス上面では樹立された填輪列が検出された。墳丘2段目裾はトレンチ南壁土層断面で確認でき、傾斜が変換するトレンチ西端より0.8m地点付近で、標高約124.9mである。周辺地形においても、この延長線上でやや平坦となる。墳丘2段目裾から東に向かって続く墳丘1段目テラスは長さ約4.4m、標高122.8m～124.9mと緩やかに傾斜する。テラス上面で樹立填輪は確認できていない。ただし、盗掘以前に設定されたと推定される関西大学の調査トレンチでは、この付近で樹立填輪を2個体検出している。そのため、本来は填輪が立て並べられていた可能性が高い。墳丘1段目裾は、トレンチ西端より6.9m地点付近であり標高は約121.8mである。基壇テラスは長さ約2.8m、標高121.0m～121.8mであり、テラス上面では1・2トレンチ同様樹立された填輪列を検出した。基壇裾は、傾斜変換からトレンチ西端より13.0m地点付近とみられ、標高は約119.6mである。また、基壇裾以東には1・2トレンチ同様平坦面が続くことが確認された。

墳丘構築過程を確認するため、トレンチ南側に幅約0.4mの断割りを行った。掘削を行ったところ、地表下0.4～1.5mで岩盤を確認した。その結果、岩盤を削り出したうえで墳裾側から墳丘中心に向かって厚さ0.4m以下の盛土を積み上げていることが判明した。また、盛土内では2トレンチ同様、墳丘内列石の可能性のある礫群を少量検出した。礫群はトレンチ西端から7.2m、10.0mの地点に認められ、石材の長さは約0.3m、幅約0.1mの扁平な方形を呈する。2トレンチ同様、墳丘に沿って配置されたものであるかは明確でない。

基壇テラスに樹立された填輪は、平面検出状況からみて布掘りで設置されており、布掘りの幅は約0.4m、深さは0.2m、埋土はa～dの4層に分けられる。また、断割り及びトレンチ南壁土層断面より填輪の下に長さ0.2～0.3m、幅0.15m以下の礫が敷き詰められていることが判明した。以上のことから、布掘りをした後、礫を設置しc・d層で固定して、填輪を設置しa・b層で埋め戻したものと想定される。填輪の下に設置された礫の役割は、填輪の高さの調整と想定される。樹立填輪は、全部で3個体確認され、南側から3トレンチ①～③と呼称する。①からトレンチ南壁までの間では樹立填輪は確認されていない。各填輪の法量はすべて直径24cm程度で、その中心間隔は40cmと密に立て並べられている。①・②は、断割りより残存高18cm程度である。①は底部端に突帯



第9図 大谷山22号墳2トレンチ平面図 (S=1/80)



第10図 大谷山22号墳3トレンチ土層断面図 (S=1/80)

をもち、体部南側に残存幅約6cm、残存高約2cmの円形スカシ孔が確認された。色調は、橙色を呈し結晶片岩を含む。外面及び内面調整はナデ調整で整えられ、②では、底部より20cm付近で断続ナデ技法Bにより貼り付けられた突帯を確認した。スカシ孔は東西方向に各1箇所確認され、残存幅4cm程度、残存高1cm以下で、円形とみられる。色調は、橙色を呈し結晶片岩を含む。外面調整は底部に板オサエがみられる他はナデで調整されており、内面は全てナデ調整である。③は、西側の一片と南側の一片が同一個体であり、復元径は約24cm、断割りの成果から残存高は約24cmと推定される。突帯は南西側面で認められるが、南東に向かって布掘り埋土へと沈み込んでいく。スカシ孔は西側の一片で認められ、残存幅約6cmである。色調は、橙色を呈し結晶片岩を含む。調整は、内外面ともにナデである。当トレンチにおいても樹立埴輪①・②内で長さ15cm程度の礫を検出している。確認された樹立埴輪は、いずれも法量や胎土の色調、調整からV群系とみられる。

第3節 出土遺物

(1) 埴輪

当古墳からは、今回の発掘調査により総数400点あまりの埴輪片が出土した。埴輪は、円筒埴輪、朝顔形埴輪、盾形埴輪、蓋形埴輪、人物形埴輪、動物形埴輪などが確認されている。いずれも残存状況が悪く、完形近くまで復元できたものは存在しない。なお、1～6、19、39、40、67以外の破片については、残存率が10%以下であり、復元した径は確度の低いものである。

円筒埴輪 (第12図～第15図) 円筒埴輪は、形態や製作技法、胎土などから大きく2つに分類することができる。1つは、胎土が明褐色を呈し外面二次調整にヨコハケを施すなどの一群でIV群系埴輪(紀伊型、環畿内南部型)と呼ばれるものである(第12図・第13図)。もう1つは、胎土が黄褐色～橙色を呈し外面の二次調整を省略するなどする一群でV群系埴輪(畿内型)と呼ばれるものである(第14図・第15図)。今回の発掘調査では、8:2程度の割合で前者が多く出土した。

IV群系円筒埴輪の法量は、口径27～38cm、底径20～32cm、器高は33.5cm以上で逆台形を呈する。1・2・3の突帯条数から4条突帯5段構成以上の形態になるとみられ、口縁から数えて4段目(1)又は3段目と4段目に2方向から径6cm程度の円形スカシ孔を穿孔する(2・3)。口縁部高は6.0～8.8cm(1～7)、突帯間隔は7.9～10.4cm(1～3)で、口縁部がやや狭い場合もあるが、その間隔はほぼ一定である(1～3)。底部高は、残存高から13.1cm以上とみられ口縁部及び突帯間隔に比べ高い。口縁端部の形状は、端部調整の強弱から3つに分けることができ、内外に肥厚するもの(1～4)、3・4のように内側へ肥厚するもの(5)、外側へ肥厚するもの(7)がある。突帯は突出高0.3～0.5cmと低いM字状のものが大半を占めるが、一部で方形を呈するものも存在する(11)。この突帯をもつ個体は、朝顔形埴輪の体部である可能性が考えられる。いずれの突帯も水平に貼り付けられかつ突帯間隔が一定であることから突帯間隔設定技法を用いたものと想定されるが、突帯の剥離が少ないため明確な痕跡は確認できていない。底部の端部は、形状から丸くおさまるもの(12・13)、平坦なもの(14～17)、内傾するもの(18)の3つに分けることができる。端部が丸くおさまるものは底部がスカート状に開き、後者2つは直立する形状を呈する。また、内傾するものは底部調整がされていることから、底部の成形・調整方法と相関する可能性がある。調整は、全体的に丁寧に行われており、粘土接合の痕跡が不明瞭であるものが多い。外面調整は、一次調整

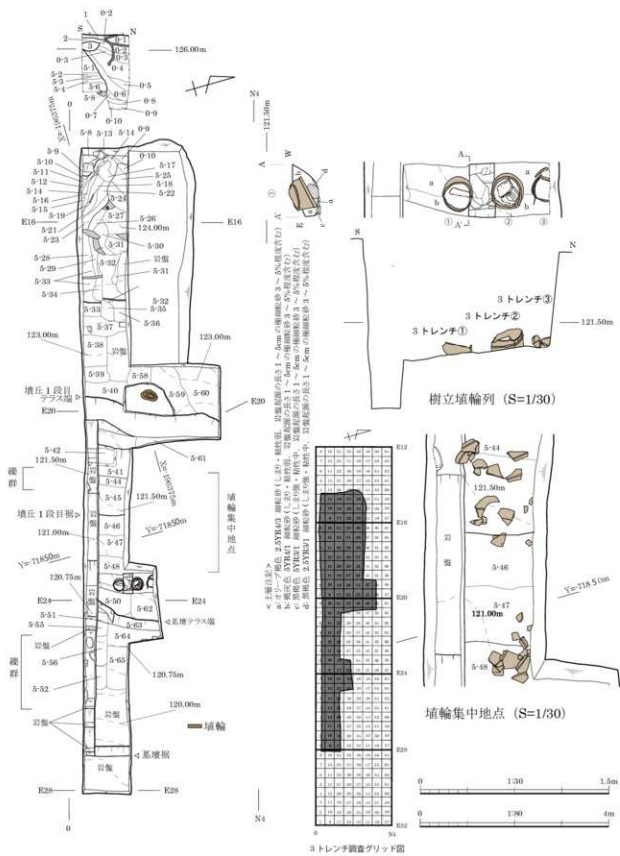
タテハケの後に二次調整としてストロークの長いヨコハケが施されるが、底部では二次調整を省略するものが認められるほか(17)、底部調整に伴うとみられるユビオサエやナデの痕跡が認められるものもある(17・18)。内面調整はタテハケ、ナナメハケ、ヨコハケ、ナデが認められる。ハケ目はいずれも、1cmあたり5～8本と粗い。また、口縁端部は内外面ともにユビオサエのちヨコナデで調整・成形される。胎土は明褐色を呈するが稀に橙色が認められ、結晶片岩や石英、長石などを含む。赤色顔料の塗布は確認できなかった。

V群系円筒埴輪の法量は、口径28～37.7cm、底径21.9～33.4cm、器高は29.1cm以上で逆台形を呈する。19の突帯条数から2条3段以上となるとみられ、口縁から数えて2段目に2方向から径6cm程度の円形スリ孔を穿孔する。口縁部高は8.3～10.6cm(19～23)、突帯間隔は10.3～12cm(19・24)で、底部高は、21cmと高い(37)。口縁端部の形状は、全てM字状を呈する(19～23)。突帯は突出高0.3～0.6cmと低く、形状はおおむね台形を呈するが、中にはややM字状を呈するものも認められる。また、板状工具の押圧による突帯の貼付けで突帯断面が扁平な方形を呈するもの(30)や断続ナデ技法Bによる貼付けでいびつな三角形を呈するもの(31・32・35・37)もある。突帯は蛇行して貼付けられたものと水平に貼付けられたものが存在し、突帯間隔設定技法は確認できない。底部の端部は、IV群系円筒埴輪同様、形状から丸くおさまるもの(34)、平坦なもの(38)、内傾するもの(35・36)の3つに分類できる。ただし、端部が平坦な38については底部に突帯が付くことから形象埴輪の基部とみられる。また、37も法量からみて同様に形象埴輪の基部と想定される。外面調整は一次調整のタテハケ、ナナメハケ、ナデのみで二次調整は確認できない。内面調整はタテハケ、ナナメハケ、ナデが認められる。ハケ目はおおむね1cmあたり5～8本と粗いが、一部内外面調整で1cmあたり10本のハケ目が確認できる。また、口縁部外面にへら記号が認められる個体が存在する。記号の全形はわからないが、「×」又は「ナナメT字状」になるものとみられる。全体的に焼成は甘く、やや軟質であるが黒斑は確認できない。胎土は黄褐色～橙色を呈し、結晶片岩や石英、長石などを含む。また、赤色顔料の塗布は確認できなかった。

朝顔形埴輪(第16図) 朝顔形埴輪は、IV群系の一群のみ認められる。法量は、口径約40cm、器高は32.3cm以上である。底部については、円筒埴輪と明確に区別することが難しくわからない。口縁部高は6.6cm程度で、壺部の長さは39～15.5cmである。口縁端部の形状は、いずれも外側に肥厚する。突帯は、低いM字状を呈するもの(39・40)と台形状のもの(41・43)が確認できる。また、頸部に貼り付けられる突帯は、頸部屈曲部(41)とそのやや下(39・40・42)に貼付けられるものがある。

外面調整は、一次調整タテハケの後に二次調整にストロークの長いヨコハケが施されており、その密度は前者が1cmあたり6本程度に対し後者は10～20本と密度が高い。内面調整は、摩擦のためよくわからないが、一部でナナメハケと44で縦方向の工具痕跡が認められる。全体的に焼成は甘く、軟質であるが黒斑は確認できない。胎土は明褐色を呈し、石英、長石などを含む。

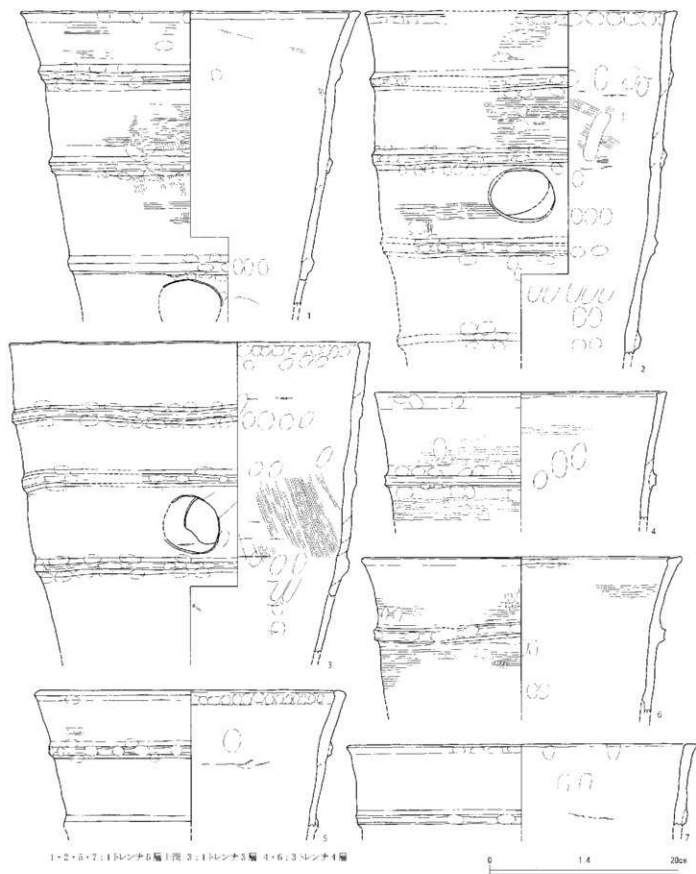
器形埴輪(第17図～第20図) 今回の調査では、盾形埴輪と蓋形埴輪を確認している。盾形埴輪は、45～47からみて独立した盾面をもたず円筒前面を盾面とするもので、側面の盾面が円筒部中央に付く形態をなす。その取り付け方から、盾持ち人形埴輪の可能性もある。円筒部の法量は24.3



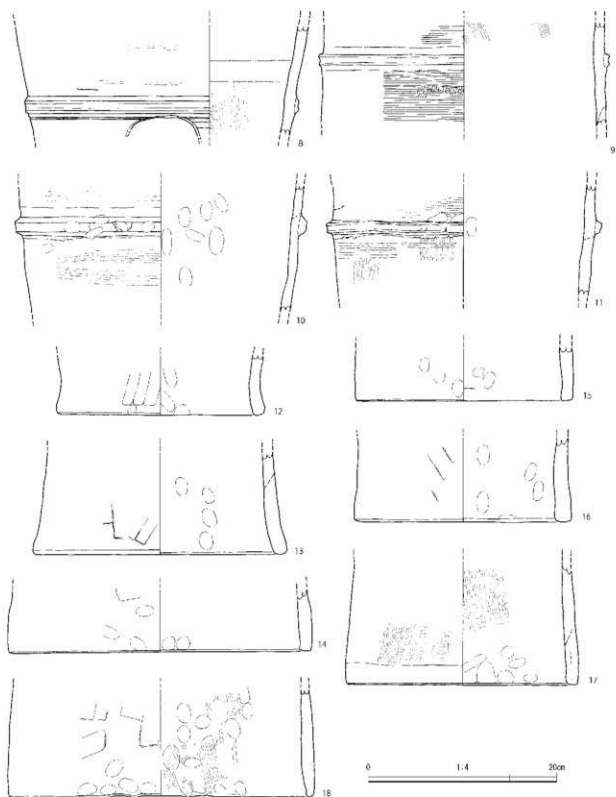
×土曜日訪査
 a:オナー/他名 2.SYR413 縦長形(1.30×0.70) 樹形痕、岩塊痕跡の長さ1~5cmの埋輪跡部3~5%程度を含む
 A
 b:別名なし 5.YR417 縦長形(1.30×0.70) 樹形痕、岩塊痕跡の長さ1~5cmの埋輪跡部3~5%程度を含む
 B
 c:別名なし 5.YR418 縦長形(1.30×0.70) 樹形痕、岩塊痕跡の長さ1~5cmの埋輪跡部3~5%程度を含む
 C
 d:別名なし 5.YR421 縦長形(1.30×0.70) 樹形痕、岩塊痕跡の長さ1~5cmの埋輪跡部3~5%程度を含む
 D

3トレンチ調査グリッド図

第11図 大谷山22号墳3トレンチ平面図 (S=1/30、1/80)

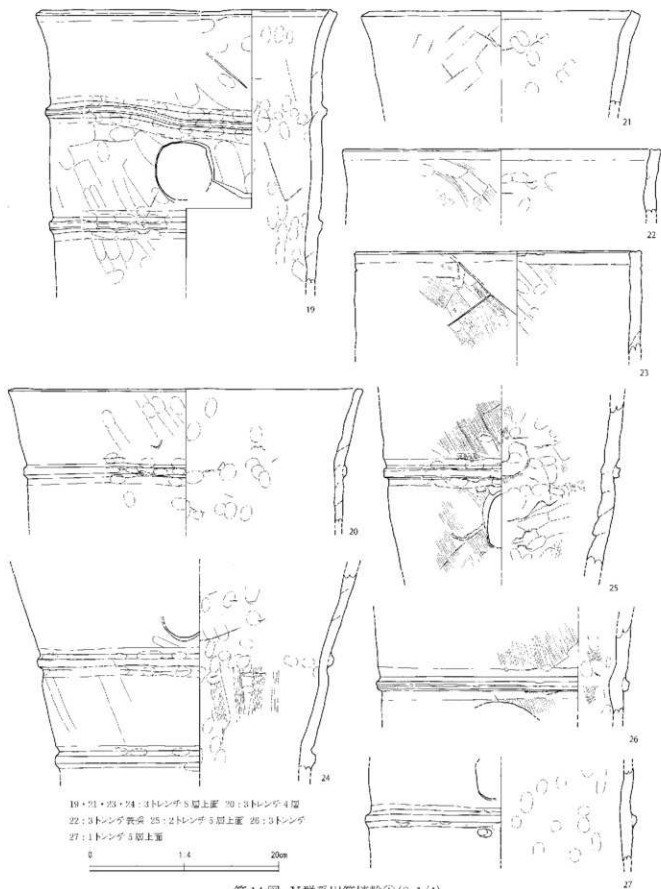


第12図 IV群系円筒埴輪①(S=1/4)

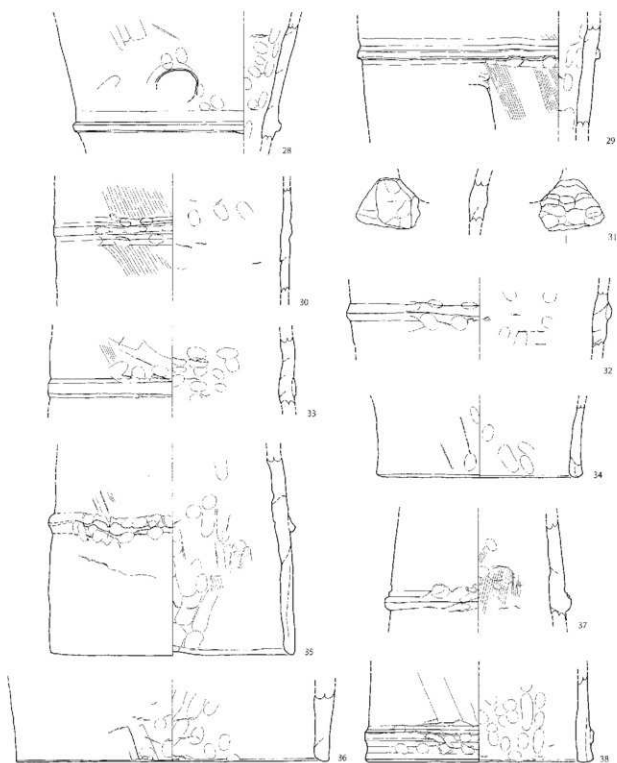


8:3ドレンチ2・3層 9・18:2ドレンチ5層上面 10・15:3ドレンチ4層 11:3ドレンチ5層上面 12:1ドレンチ4層 13・16:1ドレンチ5層上面 14・17:3ドレンチ3・4層

第13図 IV群系円筒埴輪②(S-1/4)



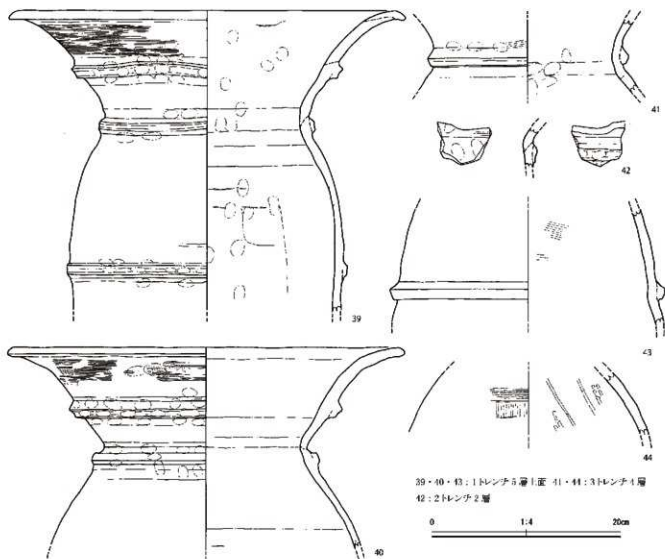
第14図 V群系円筒埴輪①(S=1/4)



28: 3トレンチ5層上面 29: 3トレンチ5層上面樹立状輪3トレンチ① 30・32・34: 1トレンチ5層上面 31: 3トレンチ5層上面樹立状輪3トレンチ② 33: 2トレンチ6層上面 35: 3トレンチ3・4層 36: 3トレンチ3層 37: 2トレンチ3層 38: 2トレンチ東側表面

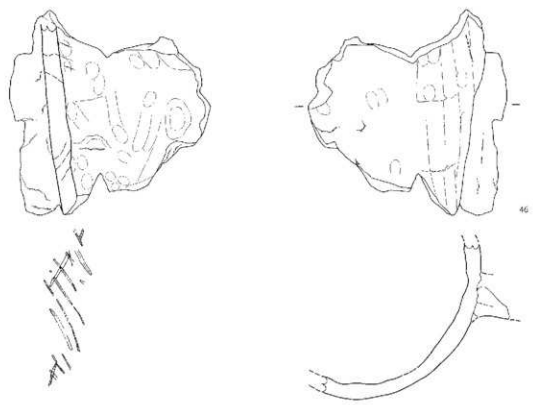
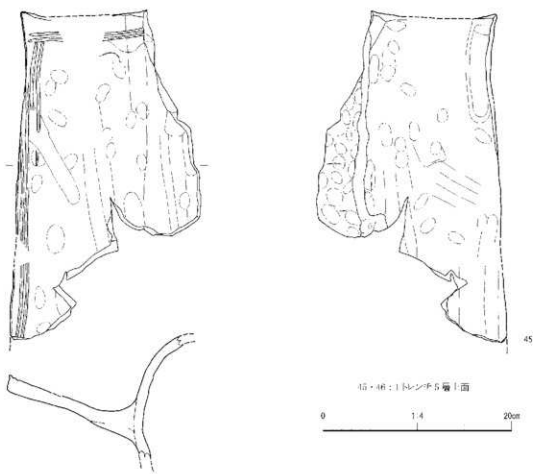
0 1.4 20 μ m

第15図 V群系円筒植輪②(S=1/4)

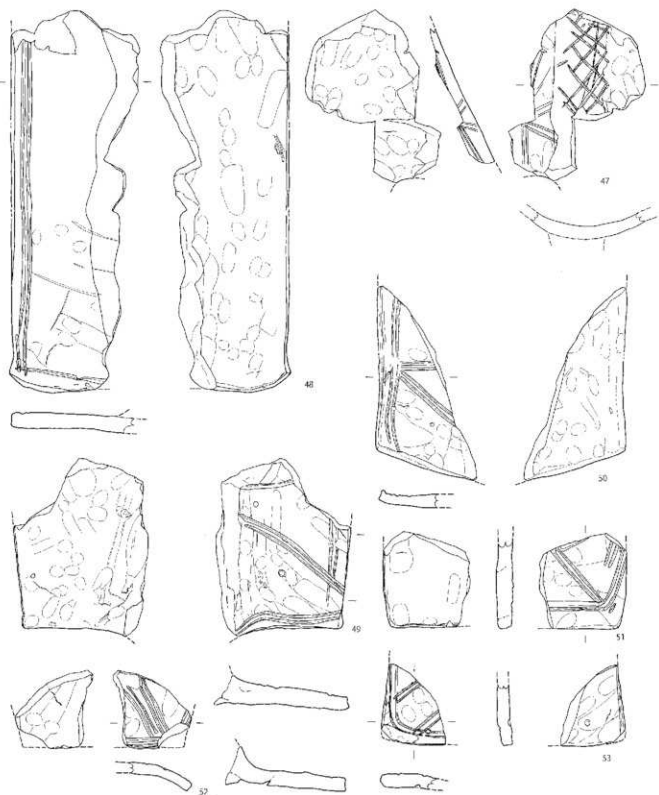


第16図 IV群系朝顔形埴輪 (S=1/4)

～28 cmで、46の断面からは、円筒部を製作途中で倒立させ再び粘土紐を積み上げると考えられる。側面の盾面の法量は幅11～12 cm、長さ40.4 cm以上とみられ、厚さ1.0～1.5 cmである(48・49)。側面の盾面を円筒部に張り付ける際には、接着面の強化のため刻み目が施される(45・48)。文様は、すべて幅0.2 cm程度の沈線を平行に2条施す2条一括沈線文である。文様パターンは大きく2つ確認でき、盾面の輪郭に沿って沈線を施すのみのもの(48・50)と輪郭に沿って沈線を施しその内側にも文様を施すもの(51～56)に分けられる。後者はさらに3つに分けることが可能で、円筒部から盾面隅に向かって施文しないもの(50)、2条一括沈線文が1組施文されるもの(49・51)、同施文が2組であるもの(52・53)である。また、円筒部盾面が無文のものと線刻を施すもののみられ、45と47からそれぞれ前者と後者に対応する可能性が高い。なお、大日山35号墳等では多条一括沈線文とともに方形刺突痕が認められる場合があるが、今回出土した盾形埴輪片からは53を除いてほぼ確認できておらず、53もまばらに施されており、その施文意図は形態化しているようにみえる。調整は内外面ともにナデが施される。胎土は明黄褐色～橙色を呈し、結晶片岩や石英、長石などを含む。

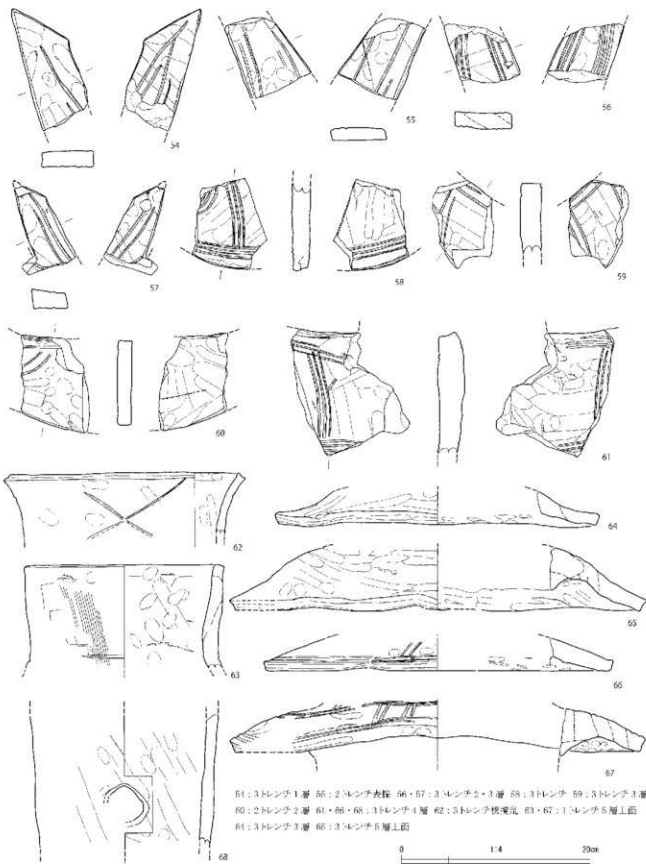


第17図 器形埴輪(盾形埴輪)①(S-1/4)

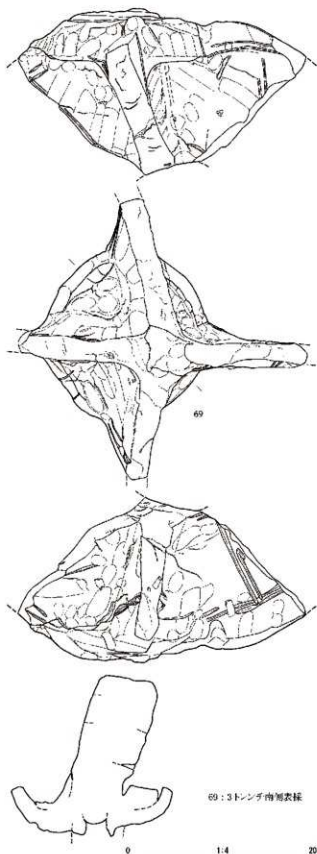


47・53：3レンチ3層 48：1レンチ5層上面 60・61：3レンチ5層上面
 62：1レンチ5層上面 49：3レンチ

第18図 器財形埴輪(盾形埴輪)②(S=1/4)



第19図 器形形埴輪（蓋形埴輪）③(S=1/4)



第20図 器財形埴輪（蓋形埴輪）④(S=1/4)

蓋形埴輪は、立飾り部（54～61・69）、笠部（64～67）、軸受部（62・63）、台部（68）が出土している。いずれも焼成は甘く、軟質であるが、黒斑は確認できない。胎土は明黄褐色～橙色を呈し結晶片岩や石英、長石などを含む。

立飾り部の文様は、2条一括沈線文及び3条一括沈線文で施文されるが、同様の文様構成とみられ、立飾り部の縁をそれぞれ1組施文し、さらにそれに直交する方向に施文を行っている。調整は、内外ともにナデが施される。軸受部分の口縁部径は、62で24.3 cm、63で21.3 cmであり、いずれも直口状を呈する。62は内外調整ともにナデとみられるが、63は外面調整をタテハケで行い、内面調整はユビオサエ、ナデである。また、62は口縁部に「X」のヘラ記号をもつ。笠部の法量は、笠部径30～43 cmで、文様は無文（64・65）と2条一括沈線文のもの（66・67）が認められる。後者では、笠部の縁と笠部を上下に区画する中位にそれぞれ1組2条一括沈線文を施し、さらに各段でそれと直交する方向に2組の2条一括沈線文を施文する文様構成を成す。68は蓋形埴輪の基部で、胴部最大径19.0 cm、残存高14.2 cm、中央に径4～5 cmの円形スカシ孔を穿つ。笠部及び基部の内外面調整は、ともにナデである。

人物形埴輪・動物形埴輪（第21図） 70は、人物形埴輪の肩～腕部とみられる。残存長は、5.2 cm、残存高2.25 cmで、厚さは1.2 cmである。一部に幅0.1 cmの線刻が施され、中央には幅1.7 cmの剥離痕が正面から背面に向かって残る。71は、線刻と円形刺突で表現された人物形埴輪の衣服とみられ、残存高8.3 cm、残存幅5.2 cm、厚さ1.2 cmである。72は、四足獣の脚部とみられ、径6.0 cm、残存高3.5 cm、厚さ1.5 cm

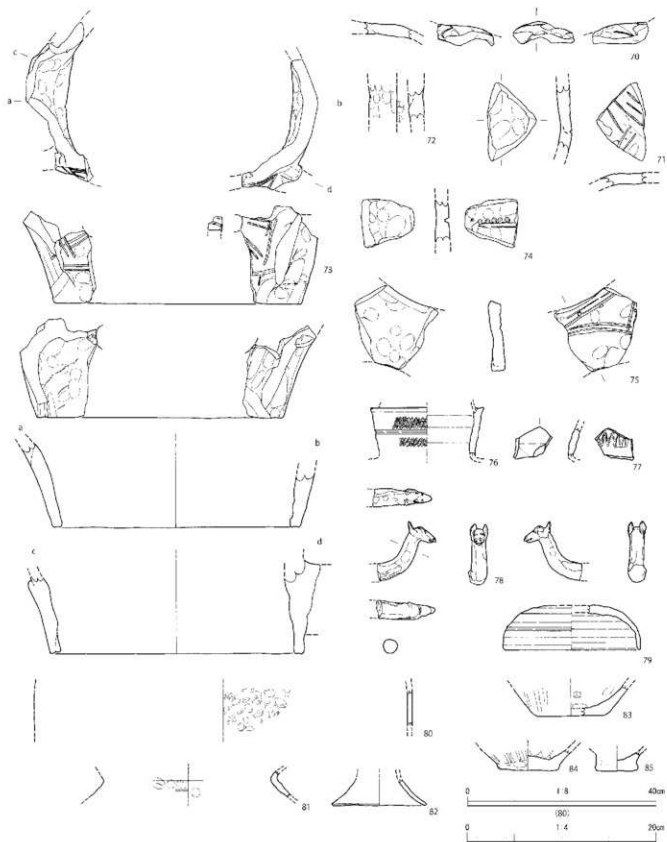
である。これらはいずれも内外面ともにナデ調整で、胎土は明黄褐色を呈し結晶片岩等を少量含む。また、全て2トレンチから出土した。

不明埴輪 (第21図) 73は復元底径26.6cm、残存高10.4cmで、円筒部側面中央に縦約7cmの突起がつく形状を成す。円筒部の正面には線刻が入ることから、形象埴輪の基部の一部かと想定される。ただし、底端部はM字状を呈しV群系普通円筒埴輪の口縁部と同様であることから、上下が逆となる可能性も考えられる。この場合、円筒部側面につく突起と円筒部正面の線刻からみて、頭部が解放された盾持ち人形埴輪の顔部である可能性も想定される。74は残存長5.1cm、残存幅5.7cm、厚さ1.6cmで中央に幅0.5cmの凹線及びその直下に径0.4cmの円形突起が施される。75は長さ7.4cm、厚さ1.6cmの破片で、線刻及びそれに沿うように3箇所方形突起がなされている。72～74はいずれも内外面ともにナデで調整され、胎土は橙色を呈し結晶片岩や石英、長石等を含む。

(2) 土器 (第21図)

須恵器 須恵器は、有蓋脚台付直口壺、壺又は器台等の飾り、坏蓋、大甕が出土している。いずれも胎土に結晶片岩を含まず、堅緻である。76・77は、有蓋脚台付直口壺の口縁部である。76は復元口径12.1cm、残存高5.2cm、厚さ0.7cmである。内外ともに回転ナデを施したのち、中位を沈線で区画し上下2段に9～11本の波状文を施す。また、口縁端付近には自然釉が付着しており、胎土は暗灰色を呈する。77は残存高2.4cm、厚さ0.6cmを呈し、内外ともに回転ナデで調整したのち8条の波状文を施す。波状文は、76に比べ極めて精緻であることから、77と76は別個体であると判断した。胎土は灰色を呈し、密である。78は、壺又は器台等に付加されていた飾りで、形状からシカなどの動物を象ったものとみられる。残存高は6.4cm、厚さは1.5cmで、調整はナデによる。大部分に自然釉が付着し、胎土は灰色を呈し結晶片岩を含まず堅緻である。79は坏蓋であり、法量は復元口径14.8cm、高さ4.8cmである。端部は丸くおさまり、かつ中央の稜にはぶい形態をなす。外面は天井から1cm程度の高さまで回転ヘラケズリがなされ、それ以外の範囲については回転ナデによって調整されている。内面は、全て回転ナデが施される。形態等からみて、陶邑窯跡群須恵器編年のTK10型式にあたるものと考えられる。80は、大甕である。2トレンチ南側で表採したもので、復元胴部径は約80cm、残存高は2.25cm、器壁の厚さは0.5cm、内外面ともにタタキで成形したのちスリ消しがなされる。胎土は、にぶい黄色を呈する。初期須恵器とみられ当古墳の時期とはやや隔たりがあることから、混入と判断した。

土師器・弥生土器 81は、2トレンチ盛土内から出土した甕である。法量は、復元頭部径18cm、厚さ0.5cmである。外面に平行タタキ痕が残る。胎土は灰褐色を呈し密である。82は高杯の脚部で、復元底径9.6cm、残存高2.9cmである。内外面ともに摩滅のため調整はわからないが、胎土は赤褐色を呈し結晶片岩を含まず密である。83～85は、弥生土器の甕又は壺、鉢の底部である。83は復元底径7.5cm、残存高3.3cm、外面はタテ方向のヘラミガキ、内面はユビオサエを施す。にぶい黄褐色を呈し、結晶片岩等を少量含む。84は底径6.5cm、残存高2.3cmで外面にはタテ方向のヘラミガキ、内面はナデを施す。胎土はにぶい赤褐色を呈し結晶片岩を含まず密である。85は1トレンチ盛土内から出土した。復元底径4.5cm、残存高2.1cm、調整は内外面ともにユビオサエであり、胎土は橙色を呈し結晶片岩を含まず密である。これら弥生土器はいずれも盛土に含まれていたものとみられ、盛土を採取したとみられる当古墳周辺にて集落遺跡が存在した可能性が考えられる。



70: 2トレンヂ 71: 2トレンヂ模座乱 72・73: 3トレンヂ3層 74: 2トレンヂ2層 75: 3トレンヂ4層 76・79: 2トレンヂ3層 77: 1トレンヂ3層
 78: 3トレンヂ5層上山 80: 2トレンヂ南包表採 81: 2トレンヂ3層 82: 3トレンヂ表十 83: 3トレンヂ4層 84: 2トレンヂ表採 85: 1トレンヂ5層

第21図 人物形埴輪、動物形埴輪、不明埴輪、土器類 (S=1/4、1/8)

第4節 まとめ

今回の測量調査及び発掘調査により、大谷山22号墳は盾形を呈する基壇のうえに2段築成の墳丘を構築する全長約80m、墳長約68mの前方後円墳であることが確認できた。

今回の調査成果と1966年に行われた関西大学の調査成果を合わせて検討すると、当古墳は第22図のように復元できる。各要素を詳しくみていくと、以下のとおりである。

墳丘2段目裾及び墳丘1段目テラスは3トレンチでのみ確認され、墳丘2段目裾の標高は約124.9m、裾から東へ向かって続く墳丘1段目テラスは、長さ約4.4m、標高122.8m～124.9mである。今回の調査では、墳丘1段目テラス上に樹立埴輪は確認できていないものの、関西大学の調査トレンチでは2個体検出されていることから、本来は設置されていた可能性が高い。設置位置は、おおむねテラスの中央にあたる。墳丘1段目裾は、1トレンチで標高約122.2m、3トレンチで標高約122.0mであり、前方部から後円部にかけてほぼ水平を呈する。基壇テラスの長さは、1トレンチで約1.7m、3トレンチで約2.8mと旧地形の制約から後円部がやや長い。いずれの上面においても、埴輪列が検出された。一方、2トレンチにおける標高122.0m付近は平坦面北端に位置し、平坦面が約5.2mと他に比べて突出して長い。人物形埴輪などの出土遺物からみて、墳丘に取り付く造出平坦面である可能性が想定される。また、2トレンチで検出された埴輪列は、造出と墳丘を区画するものである可能性が高いと考えられる。造出の規模などの解明については、今後の課題としたい。基壇裾は1トレンチで標高約119.2m、2トレンチで標高は約118.5m、3トレンチは約119.6mと墳丘1段目裾と同様、前方部から後円部にかけてほぼ水平を呈する。うち2トレンチがやや低いのは、盛土を高く積み上げて基壇や墳丘を構築するためと思われる。

以上のことから、大谷山22号墳は、標高119.0mあたりを基底として古墳が築造されたものとみられ、古墳の高さは後円部で約16.5m、前方部で約21m程度であると想定される。うち、基壇の高さは4m程度、墳丘1段目の後円部はやや楕円を呈するとみられ、径は34.5m～36.5m、高さは約2.9m、前方部の長さは約32.0m、墳丘2段目の後円部も楕円を呈し径は24.5m～27.5m、高さは約5.1mで、前方部の長さは約30.0mに復元できる。基壇を除く墳丘規模の大きさでいえば、大谷山22号墳は、総数800基以上にもなる岩橋千塚古墳群内でも天王塚古墳、大日山35号墳に次ぐ3番目の規模である。

大谷山22号墳の墳丘構築方法は、各トレンチに設定した断割りから部分的に明らかとなった。前方部の1トレンチ及び後円部の3トレンチでは、基壇部分について岩盤を墳丘の形状に合わせて削り出したうえで、岩盤のくぼみに合わせ所々厚さ0.4m以下の盛土を行い構築している様子がうかがえる。そのため、一部は墳丘構築時から岩盤が露出していた可能性がある。1トレンチでは、墳丘1段目裾あたりも同様とみられるが、3トレンチでは墳丘1段目裾以上は盛土で形成されている可能性が高い。一方、北くびれ部の2トレンチでは、旧地形が谷状を呈していたため基壇及び墳丘の大部分が盛土で構築されたものとみられる。盛土は、いずれのトレンチにおいても墳丘裾側から墳丘中心へ向かって積まれており、その構築方法は厚さ0.4m程度のオリーブ褐色と灰色等の土層を互層状に積む。また、2トレンチ及び3トレンチでは、盛土内で部分的に墳丘内列石とみられる礫群が認められた。とりわけ2トレンチの礫群は、墳丘の形状にそって四重以上に配置されていた

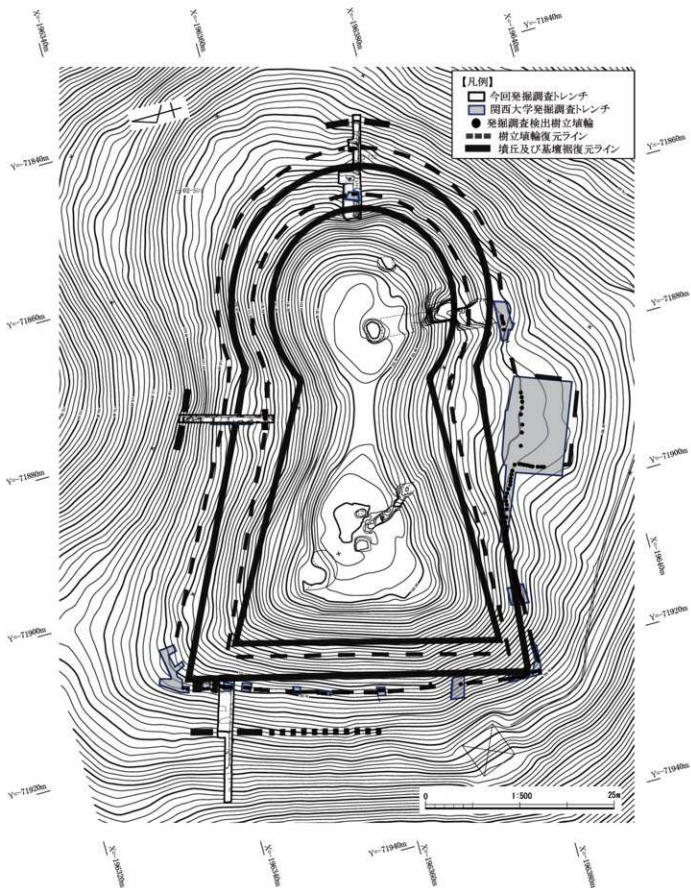
ものとみられ、崩落を防ぐことを目的として設置されたと想定される。こうした填丘構築方法は、特別史跡岩橋千塚古墳群内では前山 A58 号墳で類似する施設が検出されている。

外表施設としては、基壇テラス等で樹立する埴輪列を検出した。個体数は 1 トレンチで 5 個体、2 トレンチで 5 個体、3 トレンチで 3 個体、計 13 個体である。いずれも幅約 0.4m、深さ 0.5m 程度の布掘りにより埋設され、3 トレンチでは布掘りの底に礎が敷かれるなどして高さの調整がなされたようである。樹立埴輪の径は 0.25~0.3m で、その中心間隔は 0.25~0.4m と狭く、密に立て並べられていた様相がうかがえる。1 トレンチ基壇テラス上面では全て IV 群系、2 トレンチでは 2 トレンチ①~④が IV 群系、2 トレンチ⑤が V 群系、3 トレンチでは全て V 群系埴輪が設置されていた。大谷山 22 号墳は、これまで V 群系埴輪のみで構成されていると考えられてきたが、新たに IV 群系と V 群系が併存することが確認された点は重要である。こうした異なる系統の埴輪群が並列して並ぶ状況は、県内では大日山 35 号墳、平井 1 号墳、船戸箱山古墳でも確認されており、他地域では京都府五ヶ庄二子塚古墳などで確認されているものの類例は多くない。今調査ではトレンチが狭く、また既往の調査の情報が少ないことから樹立埴輪の詳細な配列については不明瞭である。なお、その他葺石等の外表施設は確認できていない。

出土遺物には、埴輪と土器がある。埴輪は、円筒埴輪、朝顔形埴輪、盾形埴輪、蓋形埴輪、人物形埴輪、動物形埴輪などが出土している。円筒埴輪は、樹立埴輪と同様に IV 群系埴輪と V 群系埴輪の両方が認められるが、その比率は 8 対 2 の割合と圧倒的に前者が多く認められ、埴輪列でも IV 群系埴輪が多く立て並べられていた可能性が高い。IV 群系円筒埴輪は、口径 27~38 cm、底径 20~32 cm、器高は 33.5 cm 以上で逆台形を呈し、4 条突帯 5 段構成以上の形態を成す。スカシ孔の穿孔位置は、口縁部から数えて 4 段目又は 3 段目と 4 段目に 2 方向から穿孔する 2 パターン確認できる。口縁部及び突帯間隔は比較的一定であるが、底部高が高い。その形態などは、大日山 35 号墳で出土した IV 群系円筒埴輪と酷似している。一方、V 群系円筒埴輪は口径 28~37.7 cm、底径 21.9~33.4 cm、器高は 29.1 cm 以上で逆台形を呈し、2 条突帯 3 段構成以上となる。IV 群系円筒埴輪同様、口縁部及び突帯間隔は比較的一定で、底部高も高い。形態などは大日山 35 号墳や井辺八幡山古墳などの V 群系円筒埴輪と近いものと推定されるが、当古墳から出土した埴輪の 1 段目突帯に断続ナデ技法 B が認められる点は注目される。その他形象埴輪では、その文様施文方法が大日山 35 号墳や井辺八幡山古墳などと同様、多条沈線一括法、とりわけ沈線を平行に 2 条施す 2 条沈線一括法が主体的にみられるものの、それと併用される方形刺突は明瞭でない。また胎土は明らかに IV 群系の埴輪とみられる一群は確認できず、全て V 群系埴輪の胎土に近いものである。

土器は、須恵器、土師器、弥生土器が出土している。須恵器には、有蓋脚付直口壺、壺又は器台の装飾、杯蓋、大甕が出土した。杯蓋は、その形態からみて陶邑窯跡群須恵器編年における TK10 型式にあたる。

今回の出土遺物及び既往の調査における出土遺物からみて、当古墳は陶邑窯跡群須恵器編年における MT15~TK10 型式にあたり、埴輪の編年においても矛盾しないことから、時期は古墳時代後期前半（6 世紀前半）に属するものと考えられる。



第 22 図 大谷山 22 号墳墳丘復元図 (S=1/500)

第4章 天王塚古墳の調査成果

第1節 調査の目的と方法

(1) 調査の目的

天王塚古墳は、和歌山市下和佐及び西に所在し、岩橋山塊の最高所となる標高約155mの天王塚山山頂に位置する前方後円墳である。後円部の中央に全長10.95m、高さ5.9mの横穴式石室が築かれ、南方向に開口する。横穴式石室は、結晶片岩を用いて構築され、石梁8本と石柵が設けられた岩橋型石室である。墳丘北側は柑橘畑、南側は梅畑に利用されていたが、現在作付け等は行われておらず、伐採作業前は墳丘全面に竹が繁茂していた。

既往の調査では、1906年(明治39年)の徳川頼倫による調査後、1907年(明治40年)の大野雲外の調査が行われ、石梁・石柵をもつ特異な形態の横穴式石室が存在する古墳として知られた(大野1907)。また、イギリス人N. G. マンローの著書(マンロー1908『prehistoric japan』)にも石室実測図が掲載される。1964年(昭和39年)には、和歌山市教育委員会の委嘱を受けた関西大学により、測量調査と横穴式石室と墳丘南側を中心とした発掘調査が行われている(関西大学1967)。調査の結果、横穴式石室の規模と構造が判明し、墳丘については前方後円墳で後円部に段築をもつことが明らかとなり、墳長は約86mと岩橋千塚古墳群でも最大規模の前方後円墳として知られてきた。

今回、従来の墳丘測量図だけでは天王塚古墳の範囲が明確ではないことから、特別史跡への追加指定に向けて、新たに測量調査と発掘調査による正確な範囲確認が必要とされた。このため、墳丘の形状、規模及び構造を明確にすることを目的とし、測量調査及び発掘調査を実施した。

(2) 調査の方法

発掘調査に先立ち、測量調査を実施し墳丘測量図を作成した。発掘調査はこの成果に基づき、後円部、前方部及びびくびれ部にトレンチ4箇所を設定した。

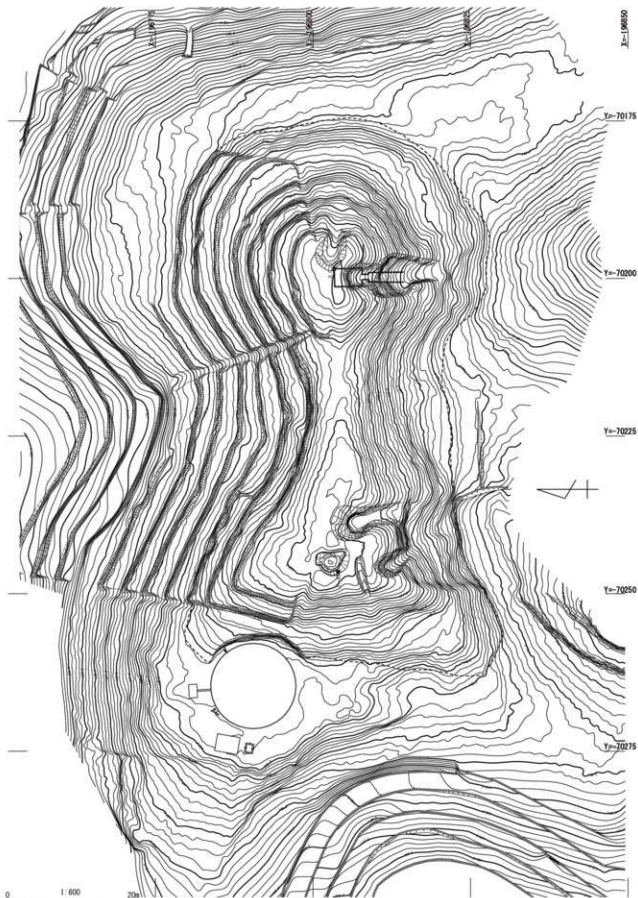
掘削は人力掘削によりトレンチ内の表土、攪乱土及び墳丘流土を除去し、墳丘等の遺構検出を行った。その後、写真撮影及び平面図、立面図並びに断面図等の記録を作成した。写真撮影は、6×7判カラーリバーサルフィルム及びモノクロームネガフィルムを使用した。また適宜、中判デジタルカメラ(4000万画素相当)、デジタルカメラ(2000万画素相当)にて撮影を行った。図面作成は、縮尺20分の1の実測図を作成し、必要に応じて縮尺10分の1の平面図を作成した。

また、記録作成後、整備委員会の調査指導を得た上で、墳丘の構築方法や構造、地山と盛土の堆積状況を確認する目的で最小限の範囲での断割り調査を実施している。すべての作業完了後、墳丘の保護のため、不織布シートにより墳丘上面を養生したのち掘削排土により埋戻しを行った。

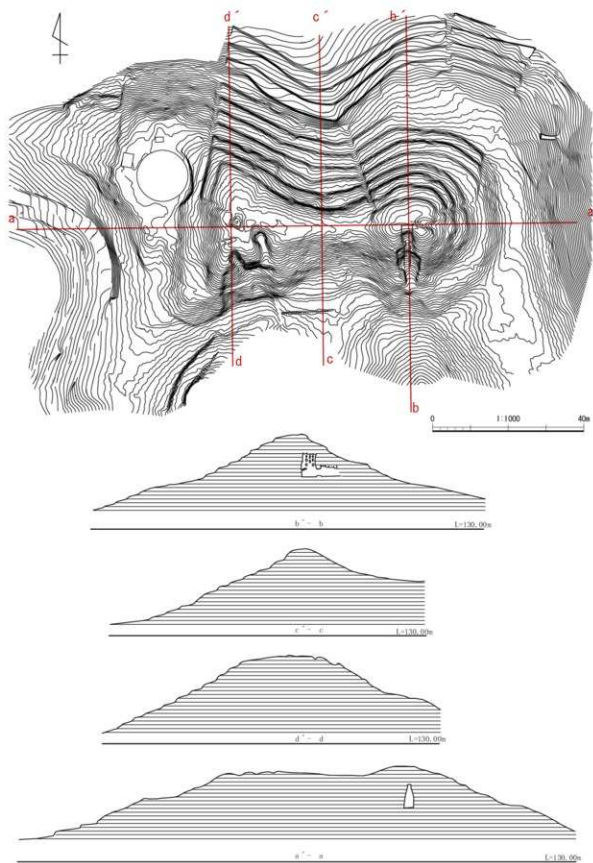
なお、発掘調査記録及び出土遺物は、調査コード「15-01-185-562」(「2015年度(平成27年度)-和歌山市-岩橋千塚古墳群-天王塚古墳」)により管理している。

(3) 測量調査の方法

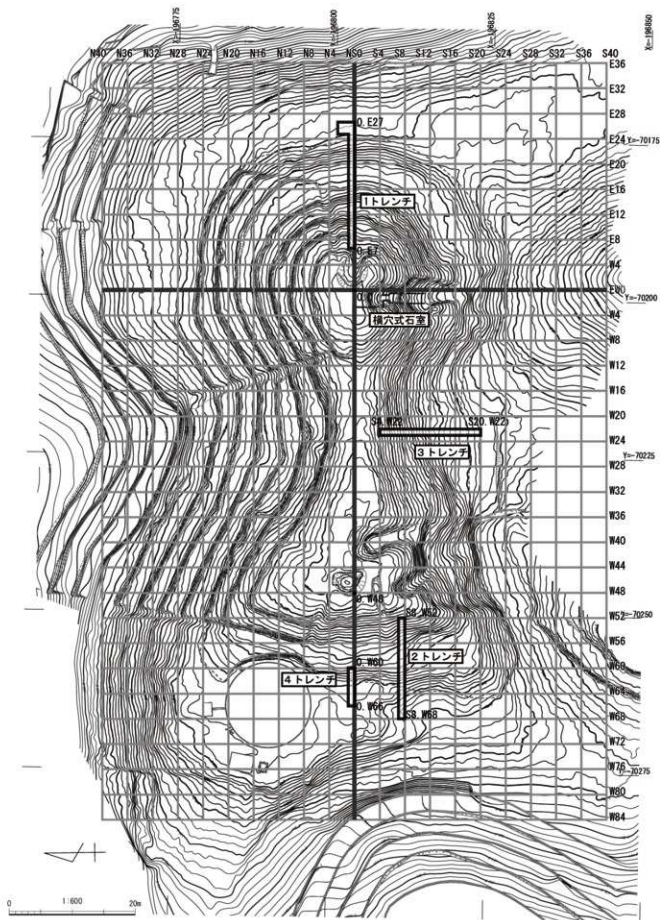
基準点測量は、電子基準点「和歌山」・「和歌山海南」・「打田」を用い、GPS測量により3級基準



第23図 天王塚古墳墳丘測量図 (S=1/600)



第24図 天王塚古墳墳丘エレベーション及び位置図 (S=1/1000)



第25図 天王塚古墳トレンチ配置図 (S=1/600)

点を2箇所設置し、この3級基準点をもとにトータルステーションにより墳丘周囲に4級基準点を設置した。墳丘測量は、既設点を利用した3次元レーザー計測により縮尺200分の1、25cmコンタ一の墳丘測量図を作成した(第23・24図)。

(4) 調査区の設定

発掘調査に際しては、墳丘測量図から後円部に任意の中心(0.0)点と、前方部の中央部に(0.W48)点を設定し、墳丘主軸(NS0)を設定した。この墳丘主軸に対して後円部任意の中心(0.0)で直交する方向に南北軸(EW0)を設定し、この2つの軸を基準として4mグリッドを設定した(第25図)。このグリッドを基準として調査区の設定を行い、遺物の取り上げ、実測図作成においてもこれを基準とした。

調査区は幅1mのトレンチを基本として設定した。後円部の墳丘主軸上の(0.E7)点、(0.E27)点を基準に1トレンチを設定した。また、前方部については、貯水タンクによる攪乱が想定されたため、前方部の墳丘主軸から南へ7m移動した(S8.W52)点、(S8.W68)点を基準に2トレンチを設定した。また、2トレンチの調査後、墳丘裾が削平により不明確であったため前方部主軸上の(0.W60)点、(0.W66)点を基準に4トレンチを設定した。またくびれ部南側については、造出等の有無を確認し昭和39年度の発掘調査区との対応関係を調べるため、墳丘主軸に直交する方向の(S4.W22)点、(S20.W22)点を基準に3トレンチを設定した。

第2節 調査成果

(1) 墳丘

天王塚古墳は、天王塚山山頂上稜線を利用して築かれており、西、南東、南西方向には幅広の尾根筋が接続する。墳丘は東西方向の主軸をもつ前方後円形であり、前方部を西に向ける。墳丘は前方部上の平坦面が広く、後円部及び前方部ともに高い立面形をもつ。古墳の東及び南には平坦面が存在し、墳丘裾はこの平坦面により明確に区別される。墳丘の東側については、平坦面の外側は急斜面となり、基壇等の施設の使用は確認できない。また、周囲には古墳等も確認できず、単独の立地を示す。南東方向には、天王塚山2号墳にかけて平坦面が広がっており、墳丘築造に際し尾根が削平されたとみられる。

墳丘上では主軸にそって境界溝が掘削されているほか、墳頂部には盗掘坑が確認される。盗掘坑は後円部では東側に1箇所、前方部では、墳頂部と南側を中心4箇所認められる。後円部及び前方部北側については、柑橘畑の開墾に伴い7段以上の段が築かれ墳丘は現状を留めていないが、墳丘の形状にそって開墾されており墳丘の形状は概ね復元できる。墳丘北西側は、貯水タンクの建設に伴って大きく地形変化が行われており、その付近には盛土による造成が認められる。それに対し、前方部南西は、周囲の地形より一段下がる。関西大学による報告では、開墾のための地下げが行われたためとされている(関西大学1967)。一方、墳丘南側については、前方部南部分が開墾により削平されているが、後円部及びくびれ部南側の遺存状況は良好である。

後円部は段築が確認された。後円部東から南にかけて明確な平坦面が確認でき1段目テラスと考えられる。後円部上段は正円形を呈しているが、墳丘裾は南北に長い楕円形を呈し上下段で中心が

異なる。横穴式石室の開口する後円部南側は石室盗掘によるためか、墳丘裾が南へ膨らむ。墳丘裾は標高144.0～145.0m付近に位置し、後円部の規模は短径約44.0m、長径約48.0mを測る。

前方部は、1段目テラスに相当すると考えられる段築が確認される。前方部幅は現状で約54.0mを測る。墳丘北側についても傾斜変換線を元に復元すると前方部幅はさらに広がる。また、貯水タンク建設により不明瞭だが、前方部南の墳丘裾では標高145.6～146m付近に平坦面が認められる。

くびれ部南側については、比較的墳丘の遺存状況も良いが段築等は確認できていない。南側のくびれ部にかけては、等高線が南に張り出しており造出等の施設の存在するようにみえるが、現地では果樹園に伴う段差や石垣が存在する。

(2) 後円部の調査 (1 トレンチ)

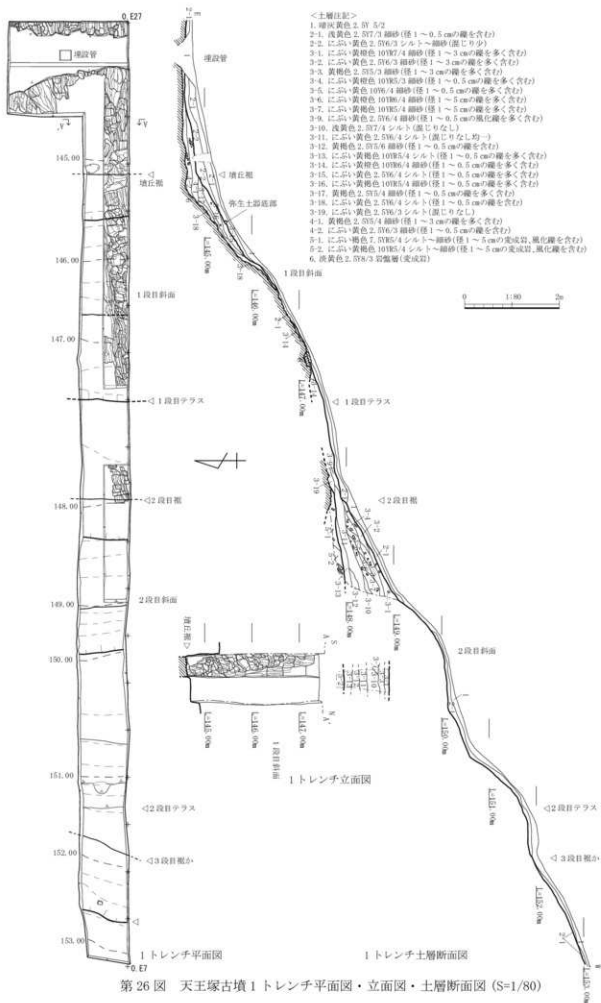
1 トレンチは、後円部の墳丘裾を確認し、古墳の規模を明らかにする目的で設定した。トレンチは、後円部頂の盗掘坑から墳丘裾の平坦面にかけての後円部主軸上に設定しており、幅1～2.5m、長さ約20mである。

墳丘裾では、表土直下で礫群が確認され、これらの性格を明らかにするため北側へトレンチを拡張した。しかしながらこの礫群を除去すると地山岩盤層を掘り込んだ埋設管が検出され、墳丘裾では古墳に伴う施設は認められなかった。

調査の結果、墳丘裾、1段目斜面並びにテラス及び2段目斜面を確認した。墳丘裾はE23.8付近で確認され、標高144.8mで、約4.2mの平坦面が墳丘外へと続く。1段目テラスは、墳丘測量図においても標高147.4～148.2m付近に平坦面が認められ、発掘調査ではE16.9～E19付近、標高147.5～147.8m、幅約2.2mの範囲で確認された。これにより後円部1段目の高さは2.7～3.0mを測る。また、2段目斜面の上部には2つ以上の平坦面が存在し、墳丘測量図からも墳丘西側にかけて平坦面が認められ、E9.3付近に3段目裾が推定される。しかしながら、柑橘畑による開墾が及んでおり、本来の段築に伴うものか、畑の段に伴うものか今後の調査により明らかにすべきである。このように標高約154.9mで後円部頂となり、墳丘裾を検出したことにより後円部の高さは約10.1mに復元できる。なお、葺石や埴輪列等の外表施設は認められなかった。

墳丘裾では、表土(第1層)下には、厚さ約0.3mの墳丘流土(第2層)が確認されるが、墳丘斜面及びテラスでは、墳丘流土は厚さ約0.1mと薄く、表土直下で墳丘盛土(第3層)または地山岩盤層(第6層)となる地点も存在する。

断割り調査を行ったところ、1段目テラスから1段目斜面にかけては、墳丘盛土が厚さ0.1～0.3mと薄く堆積するのみで、多くは地山岩盤層を削り出して墳丘としていることが判明した。地山岩盤層の上面に薄く盛土を行い、表面を整えることにより墳丘斜面を整形したものとみられる。また、墳丘裾においても地山岩盤層上に整地層(第4層)を設け、その上部に盛土を行うことを確認したが、墳丘内列石等の墳丘構築法は認められなかった。2段目斜面より上部では、墳丘盛土は厚さ0.2～1.0m以上と厚く、地山(第5層)の上部に盛土を行い、墳丘2段目以上を築造していることが確認された。地山(第5層)は、岩盤層の上部に存在する山土主体の地山であり、1段目テラス付近から水平に墳丘下へと続いていく。墳丘盛土は水平に積み上げられ、いずれも地山起源と考えられる礫混じりの細砂と混じりが少ないシルトを交互に積み上げる。平面及び断面観察からは、



第26図 天王塚古墳1トレンチ平面図・立面図・土層断面図(S=1/80)

おおむね厚さ0.2～0.3m、幅0.4～0.8mの単位が認められる。

古墳に伴う遺物の出土は認められなかったが、墳丘盛土には弥生時代後期の所産と考えられる弥生土器やササカイト剥片を含む。

(3) 前方部の調査 (2トレンチ)

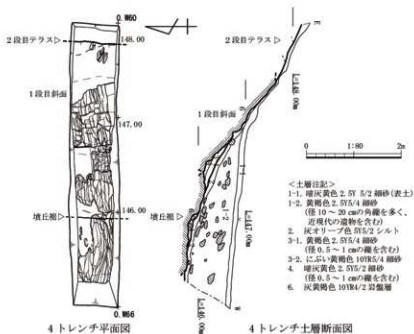
2トレンチは、前方部の墳丘裾を確認する目的で、前方部頂から墳丘裾の平坦面にかけて墳丘主軸より南に設定したトレンチである。周辺施設の有無を確認するため墳丘裾の西にかけても調査区を設定しており、トレンチは幅約1m、長さ約16mを測る。

調査の結果、1段目斜面並びにテラス及び2段目斜面を確認した。2トレンチを設定した前方部南西にかけては、開墾による削平が報告されており、W63.8付近に傾斜変換が認められるが不明瞭で墳丘裾は明瞭ではない。表土直下で地山岩盤層(第6層)となり、トレンチ西端では近代以降の土地境界溝が検出されていることから、開墾に伴い墳丘裾は削平されていると考えられる。また、1段目テラスについては、墳丘測量図でも平坦面が認められており、発掘調査ではW56.8～W60付近で確認され、標高148.0～148.5m、幅約3.2mを測る。後述する4トレンチの成果を踏まえると、前方部1段目は高さ2.1～2.6mと考えられる。また、2段目斜面の上部は、標高約153.0mで前方部頂となり、前方部は高さ約7.0mに復元できる。

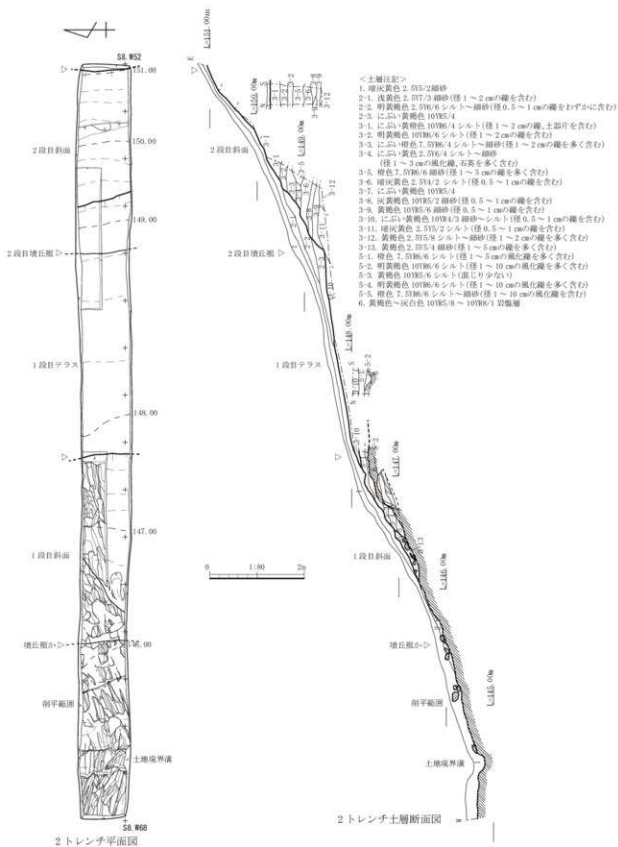
墳丘裾付近の表土(第1層)下では、墳丘流土(第2層)及び墳丘盛土(第3層)が認められず、地山岩盤層(第6層)が認められることから開墾に伴い削平されたと考えられる。また、2段目斜面裾では、墳丘流土が厚さ約0.3mを測るが、墳丘斜面でも、墳丘流土は厚さ約0.1mと薄く、総じて墳丘流土の堆積は少ない。

断割り調査を行ったところ、1段目テラスから1段目斜面にかけては、墳丘盛土が厚さ約0.2～0.3mと薄く、1トレンチと同様に前方部においても1段目は、地山(第5層)及び地山岩盤層(第6層)を削り出して墳丘としている。2段目斜面では、墳丘盛土は0.4～1.0m以上と厚く、そのほとんどは盛土により墳丘とすることが確認された。墳丘盛土はいずれも、地山起源と考えられる橙色～黄褐色を呈する稜鏡じりの細砂と混じりが少ないシルトを交互に積み上げるほか、遺物包含層に類似した弥生土器を含む黄灰色のシルト層も認められる。

墳丘盛土からは弥生時代後期の所産と考えられる土器が多く



第27図 天王塚古墳4トレンチ平面図・土層断面図(S-1/80)



出土したが、古墳に伴う遺物の出土は認められなかった。

(4) 前方部の調査 (4トレンチ)

4トレンチは、2トレンチで不明確であった前方部の墳丘裾を確認する目的で、墳丘裾を中心に墳丘主軸上に設定した幅約1m、長さ約6mトレンチである。

調査の結果、1段目斜面及びテラスを確認した。墳丘裾は、W64.2付近、標高約145.9mで傾斜変換が認められ、整地層(第4層)及び地山岩盤層(第6層)が立ち上がる。また、2トレンチと同様にW60.4、標高148.0~148.2m付近で傾斜変換が認められ、これが1段目テラスと考えられる。4トレンチの成果から、前方部1段目は高さ約2.1~2.3mを測る。

墳丘裾付近の表土(第1-1層)下には、貯水タンク建設に伴い造成された近現代の客土(第1-2層)が認められ、墳丘裾にかけて厚く堆積する。1段目斜面では墳丘流土(第2層)の堆積は薄く、墳丘裾では表土直下で地山岩盤層(第6層)となる。1段目テラスから1段目斜面では、地山岩盤層を削り出して墳丘としている。1段目テラスから1段目斜面にかけては、地山岩盤層のくぼんだ範囲には墳丘盛土(第3層)が厚さ0.2~0.3mと薄く認められ、墳丘斜面を盛土により整形している。墳丘盛土からは弥生時代後期の土器が出土した。

(5) くびれ部の調査 (3トレンチ)

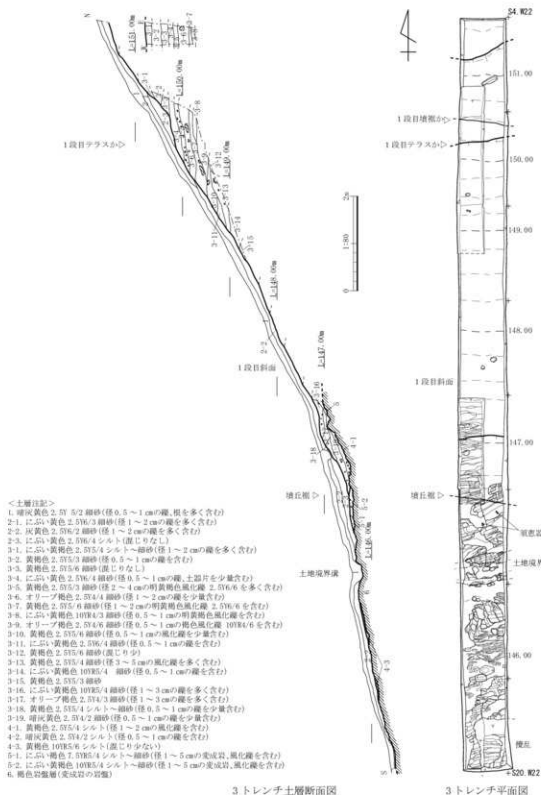
3トレンチは、くびれ部の墳丘裾を確認するとともに、造出等の有無を明らかにする目的で設定した。トレンチは、前方部鞍部から墳丘裾の平坦面にかけて墳丘主軸に直交する形で設定しており、幅約15m、長さ約16mを測る。

調査の結果、墳丘裾及び1段目斜面を確認した。墳丘裾はS14.1付近で確認され、標高は約147.5mを測る。また、くびれ部南については墳丘測量図からは段築は確認されない。発掘調査においては、S6.1~S6.8付近、標高約150.22mで傾斜変換が認められ、幅0.7m程度のわずかな平坦面が確認されているが1段目テラスについては不明瞭であり、今後の調査で明確にすべきと考えられる。

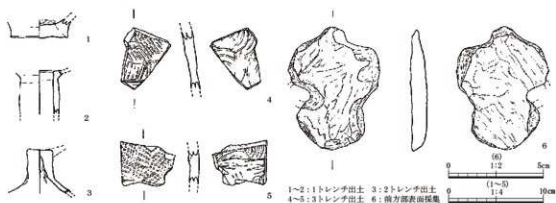
くびれ部の高さは、標高約152.8mで前方部鞍部頂となり、墳丘裾を検出したことにより約5.3mに復元できる。墳丘裾の南では、近代以降に掘削された境界溝が認められるが、造出に伴う段等などは認められなかった。墳丘測量図では南側へ等高線の張り出しが認められるが、現況では開墾に伴い石垣が存在しており、今回の調査範囲では造出等の存在は認められなかった。このほか、トレンチ南端のS19付近では後世の攪乱坑が検出されている。

墳丘裾では、表土(第1層)下には、約0.2mの墳丘流土(第2層)が確認されるが、墳丘斜面及びテラスでは、墳丘流土は約0.1mと薄く堆積する。

断割り調査を行ったところ、墳丘裾から1段目斜面の中腹にかけては、墳丘盛土が厚さ約0.1~0.3mと薄く堆積するのみで、1段目斜面の中腹までは地山(第5層)及び地山岩盤層(第6層)を削り出して墳丘としていることが判明した。他のトレンチと同様に地山岩盤層の上には盛土を行い、墳丘斜面を整形している。これはくびれ部においては1段目の高さが高いことに起因する。1段目斜面の上部では、墳丘盛土は厚く、盛土により墳丘を築造していることが確認された。墳丘盛土は水平に積み上げられ、いずれも地山起源と考えられる礫混じりの細砂と混じりが少ないシルトを交互に積み上げる。平面及び断面観察からは、おおむね厚さ0.2~0.4m、幅0.3~1.0mの盛



第 29 図 天王塚古墳 3 トレンチ平面図・土層断面図 (S=1/80)



第30図 出土遺物 (S=1/2、S=1/4)

土の単位が認められる。

S14.5~S15付近である墳丘裾の平坦面では、地山直上で須恵器甕の体部数点が出土している。いずれも細片で原位置をとどめるものではない。隣接する昭和39年に行われた関西大学による墳丘調査でも須恵器の破片が出土しており、同様の出土状況を示す。

第3節 出土遺物

各トレンチからはコンテナ1箱分の遺物が出土した。遺物の多くは墳丘盛土から出土した弥生時代のもので、古墳に伴う遺物は少ない。

(1) 土器

1~3は弥生土器・土師器である。1は1トレンチの1段目斜面上の墳丘流土(第2層)から出土している。弥生土器壺の底部であり、弥生時代後期のものと考えられる。2は1トレンチの2段目斜面の断割り調査中に墳丘盛土(第3層)中から出土した土師器である。低脚の碗形高坏で三方向の円形透孔をもち、庄内式期から古墳時代前期の所産である。3は2トレンチの墳丘盛土(第3層)から出土した弥生土器である。柱状脚をもつ高坏であり弥生時代後期前半のものと考えられる。4・5は3トレンチの墳丘裾の平坦面から出土した。須恵器甕の体部片である。4は外面に平行タタキの後に水平方向のカキメを施し、内面に同心円状の当て具痕が認められる。5は外面に格子タタキを施す。内面の調整は粗く粘土紐の接合痕が残る。

(2) その他の遺物

6は、前方部西で表採された結晶片岩製の大型石庖丁である。紐通し孔付近の破片であり、回転工具により穿孔する。

第4節 まとめ

(1) 墳丘構造及び古墳の内容

今回の測量調査及び発掘調査により、後円部、前方部及びびくびれ部の墳丘裾を確認した。調査成

果から天王塚古墳は墳長 88.0m の前方後円墳であり、岩橋千塚古墳群中における最大規模の前方後円墳として位置づけられる。

後円部の規模は、高さ 10.1m、直径 44.0～48.0m に復元できる。玄室の高さ約 5.9m で、8 本もの石梁をもつ横穴式石室を内部主体に持つため、後円部は腰高な立面形を示す。後円部の段築は、1 段目斜面並びにテラス及び 2 段目斜面を確認した。2 段目以上については、今後の墳丘調査によって明らかにする必要があるが、後円部では 2 段築成以上の段築を有すると考えられる。

前方部の規模は、高さ約 7.0m、前方部の幅は現状で約 54.0m、復元すると約 56.4m と推定される。前方部の段築は、1 段目斜面並びにテラス及び 2 段目斜面を確認し、前方部は 2 段築成となる。前方部の 1 段目テラスは、後円部の 1 段目テラスよりも約 0.5m 高く位置する。

一方、くびれ部は、高さ 4.5m、3 トレンチ付近では前方部の幅は約 26.4m に復元できる。くびれ部の段築は、発掘調査では約 0.7m の平坦面を確認したが、1 段目テラスとなるか確定的ではない。現況では、くびれ部付近では前方部幅が狭くなるため、後円部や前方部で確認されたテラスと同様の幅を確保するのは難しい。前方部側面の段築については今後の検討課題としたい。

墳丘は、1 段目テラスまでを地山（第 5 層）及び地山岩盤層（第 6 層）を削り出しにより、2 段目以上を盛土により墳丘を築造する。後円部では断割り調査から 1 段目テラスを境に地山が水平に堆積し、墳丘中心部へと入りこむ状況が確認された。後円部及び前方部では、おおむね標高約 148.0m 付近まで地山岩盤層が存在する。昭和 39 年の横穴式石室の調査においても横穴式石室は地山及び地山岩盤層を掘り込んで築造されていることが明らかとなっており、今回明らかとなった後円部の墳丘構造と横穴式石室の構造を比較すると、玄室の石梁中央付近までは、地山及び地山岩盤層を掘り込む事により石室が構築されたのみならず、石室上部以上が盛土により構築されたと考えられる。一方、くびれ部付近では、地山及び地山岩盤層は、墳丘の 1 段目斜面の途中までしか認められず、標高約 147.0m 付近まで存在し、くびれ部付近ではやや地山及び地山岩盤層の高さが低くなる。このように天王塚古墳は、1 段目墳丘の大半を地山及び地山岩盤層を削り出して築造しており、盛土による構築は全体の 1/3 の程度とみられる。

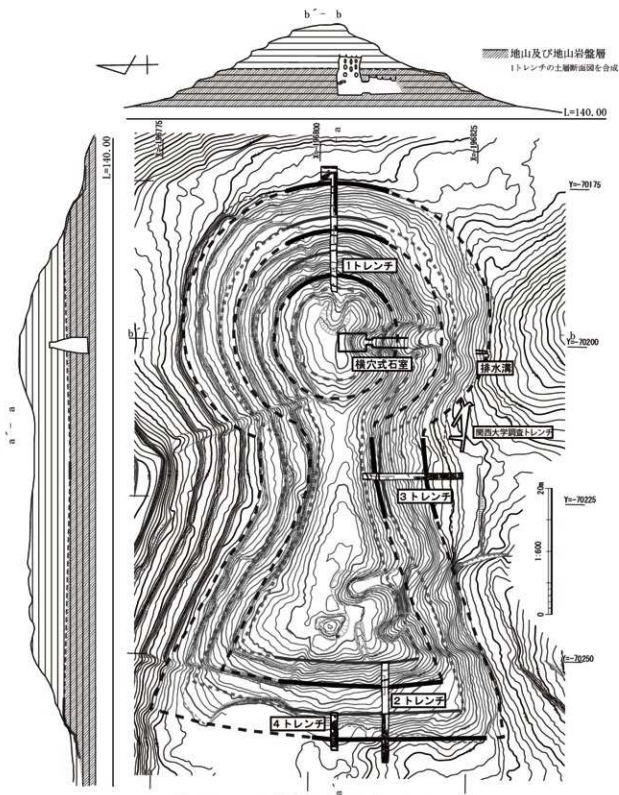
また、今回の発掘調査では、葺石並びに埴輪列等の外表施設、造出、基壇及び周濠については確認されていない。遺物の出土はくびれ部でわずかに認められるがいずれも細片であり、古墳祭祀の場は墳丘から横穴式石室へと移行した段階と考えられる。

古墳に伴う出土遺物が少なく、古墳の築造時期を判断する資料は得られていない。既往の調査により出土した遺物から、天王塚古墳の時期は、陶器窯跡群の須志器編年における TK10～MT85 型式期と考えられる。横穴式石室の編年観からも大日山 35 号墳、大谷山 22 号墳より後出する要素が認められることから、現状では古墳時代後期中葉（6 世紀中葉）とするのが妥当といえる。

（2）天王塚古墳の評価

岩橋千塚古墳群では、大日山 35 号墳、大谷山 22 号墳、井辺八幡山古墳と古墳時代後期前半から継続的に大型前方後円墳が築造され、その後天王塚古墳が築かれる。天王塚古墳と先行するこれらの古墳では、石梁や石棚をもつ岩橋型石室を継続して内部主体に採用し、玄室高の増加に顕著に認められる石室規模の発達など、同一古墳群内で共通する要素が存在する。また、地山削り出しによる墳丘構築法についても同様の連続する要素としてとらえられる。しかしながら、今回の調査成

果からは、埴輪の樹立をはじめとして、葺石、造出や基壇・周濠の有無など多くの点で先行する古墳とは内容が異なり断絶する要素が多く存在することが明らかとなった。こうした点から、天王塚古墳は、近畿地方中央部で更新された新たな古墳祭祀や古墳築造に係る情報を入手しつつ築造されたと考えられ、古墳築造に係る被葬者の性格を示すものとして特筆される。



第31図 天王塚古墳墳丘復元図 (S=1/600)

第5章 総括

第1節 大谷山22号墳

(1) 立地と墳丘構造・埋葬施設

大谷山22号墳は、岩橋山塊の北西先端部である標高約132mの大谷山山頂に位置する前方後円墳である。東西方向に主軸をもち、全長約80mの盾形の基壇上に墳長約68mの2段築成の前方後円墳が築かれている。墳長は、天王塚古墳(88m)、大日山35号墳(86m)について、岩橋千塚古墳群の中で第3の規模である。後円部は、同心円ではなく、最上段平坦面の中心点が前方部にやや偏っている。南側のくびれ部には、主軸方向に平行して長さ約14m、幅約8mの広い別区をもち、円筒埴輪で区画されている。区画内からは多数の埴輪類と土器類が出土し、祭祀が行われたと推定される。基壇のテラス部等では、布掘りした溝内に円筒埴輪が樹立され、墳丘を圍繞している。

後円部には、墳丘主軸にほぼ直交して横穴式石室が築かれて、南方に開口している。石室は、全長約7.8mで、玄室・玄室前道・羨道からなる岩橋型横穴式石室である。2枚の石欄と1枚の水平石梁を有し、前道の袖部は東側に偏っている。

(2) 出土遺物

今回の調査では、円筒埴輪・朝顔形埴輪・盾形埴輪・蓋形埴輪・人物埴輪・動物埴輪の埴輪類、須恵器の大甕・坏蓋・有蓋脚台付直口壺・器台等の装飾が出土した。須恵器はMT15~TK10型式期に属する。他に高杯などの弥生土器も少量出土した。これらの出土遺物や横穴式石室の型式などから大谷山22号墳は、古墳時代後期前葉(6世紀前半)に築造されたと推定される。

第2節 天王塚古墳

(1) 立地と墳丘構造・埋葬施設

天王塚古墳は、岩橋山塊の最高所である標高約155mの天王塚山山頂に後円部が立地し、西に延びる尾根上に前方部を配する。墳丘から西部、南部、南東部に尾根筋が延び、比較的広い平坦面が確保可能な地形上に選地されている。周囲には古墳が築かれておらず、隔絶した立地状況を呈している。北方は紀の川から和泉山地が広がり、南西方には和歌山市の和歌の浦から有田市の島嶼部が望める。

古墳は、東西方向に主軸をもち、墳長約88mの2段築成の前方後円墳で、岩橋千塚古墳群では墳丘長で最大である。後円部の規模は直径44.0~48.0m、高さ10.1mであり、後円部は同心円ではなく、最上段平坦面の中心点は基底部円周の中心点から前方部側に4m程偏っている。後円部は3段築成の可能性もある。前方部の規模は、復元幅約56.4m、高さ約7.0mで、前方部先端部は2段築成であるが側面の段築は明瞭ではない。

発掘調査の結果、三波川変成帯の結晶片岩類の岩盤層の高さは、後円部と前方部が標高約148m前後で、くびれ部は約1m低いことが判明した。このため墳丘は、後円部と前方部の第1段平坦面までを地山及び岩盤を整形して墳丘としている。

横穴式石室は後円部上段面円周のほぼ中心に玄室の北東隅が位置し、主軸にほぼ直交して南に開口して築かれている。石室は、全長約10.95mで、玄室・玄室前道・羨道からなる岩橋型横穴式石室である。2枚の石欄と8枚の垂直石梁を有し、前道は玄室の中央部に取り付く。

石室の玄室天井高は約 5.9m と熊本県の大野窟古墳の横穴式石室 (6.48m) に次いで全国で第 2 位の高さを誇るが、後円部及びびくびれ部の墳丘の状況から、玄室高に対してその約 2/3 の深さ (約 3.8m) 付近まで岩盤を石室規模に合わせて削り抜いて、その底部から石室を構築している。石室の下半部以上が岩盤の中に造り込まれており、2 枚の石棚や 8 本の石梁による石室の構造補強だけでなく、下半部石積みも岩盤によっていわば固定されている状態となっており、より強固な構造となっている。6 世紀初めに築かれた、花山 33 号墳の横穴式石室でも岩盤を 1.4m ほど掘り込んで築いており、岩橋千塚古墳群の横穴式石室では一般的な技法だと推定される。この技法により、石室の安定化、墳丘高の低減及び盛り土量の縮減を図っており、合理的な土木工法である。

(2) 出土遺物

古墳に伴う遺物は、ごく少量で須恵器甕の体部片などである。弥生時代後期から古墳時代前期の弥生土器と土師器が出土している。岩橋千塚古墳群では、花山丘陵や井辺前山丘陵でも、同時期の土器が出土しており、周辺に高地性集落が営まれていた可能性がある。

関西大学の調査時では、原位置を留めている遺物として、羨道部から土師器の壺・直弧文が描かれた漆膜が出土している。原位置は留めていないと考えられるものの、石室内の石棚上から小玉 20 点・金銅製飾り金具片・鉄片・小札片が、玄室と羨道からは須恵器の器台・壺・坏の小片、玉類 (銀製空玉・ガラス小玉・瑪瑙切子玉・琥珀小玉・滑石白玉)、金銅製金具片等が出土し、南くびれ部からは須恵器の甕・器台・高坏の小片が出土している。これらの遺物から、埋葬時には豊富な副葬品があったことが窺える。天王塚古墳は、出土遺物と横穴式石室の型式などから古墳時代後期中葉 (6 世紀中頃) に築造されたと推定される。

第 3 節 岩橋千塚古墳群周辺の古墳時代後期における大型古墳の変遷

大谷山 22 号墳と天王塚古墳の岩橋千塚古墳群の中での位置付けについて考えるために、古墳群に横穴式石室が採用された 5 世紀末以降の首長墓等大型古墳の変遷について以下にまとめた。

岩橋千塚古墳群の後期古墳時代における首長墓の変遷は、現状では花山 6 号墳→大日山 35 号墳・大谷山 22 号墳→井辺八幡山古墳→天王塚古墳→將軍塚古墳→寺内 57 号墳→井辺 1 号墳と推定される。

時期	古墳名 墳長	須恵器型式	墳形	造出	墳輪	羨道	石梁
I	大谷山 6 号 25m・27 号 21m・28 号 25m	TK47	前方 後円	無	円筒 形象	左片	無
	花山 6 号 49m・33 号 32m	MT15		両・片		左片	無
	大日山 35 号 86m 大谷山 22 号 67.5m	TK10 古		両・片		左片	水平
II	井辺前山 6 号 52m 井辺八幡山 67m 知事塚 34.5m	TK10 新	前方	両側	円・形	左片	不明
III	天王塚 88m 將軍塚 42.5m	MT85	前方	無	無	中央	垂直
	郡長塚 30.5m	TK43	後円				
IV	寺内 57 号 40m 前山 A 46 号 27m 前山 A67 号 27m 大谷山 16 号 26.5m 船戸箱山 21m(岩出市)	TK43	円		無	中央	垂直
V	八幡塚 20m(記の川市)	TK209	方・円		無	中央	垂直
VI	井辺 1 号 40m 花山 14 号 15m	TK217	方・円		無	中央	垂直
VII	岩内 3 号 19.3m(御坊市) 八幡宮 16m(橋本市)		方・円		無	中央	無

写真図版1 (大谷山 22号墳)



1. 大谷山 22号墳を望む (北から)



2. 後円部墳丘 (北から)



3. 前方部墳丘 (西から)



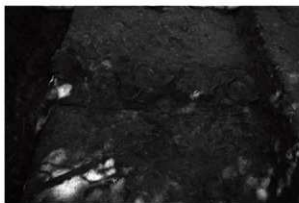
1. 1トレンチ完掘状況(断ち割り後)



2. 1トレンチ基壇裾転落埴輪検出状況(西から)



3. 1トレンチ南壁土層断面(北から)



4. 1トレンチ基壇テラス上面樹立埴輪検出(東から)



5. 1トレンチ西側岩盤層検出状況(西から)



1. 2トレンチ南半全景 (北から)



2. 2トレンチ北半全景 (北から)



3. 2トレンチトレンチ設定前状況 (南から)



4. 2トレンチ樹立墳輪列 (東から)



5. 2トレンチ中央東壁土層断面及び墳丘内列石
検出状況 (西から)



6. 2トレンチ北側東壁土層断面 (西から)



1. 3トレンチ断割り後完掘状況(東から)



2. 3トレンチ断割り後完掘状況(北から)



3. 3トレンチ基壇テラス上樹立埴輪列(東から)



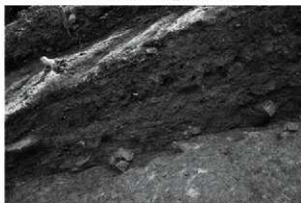
4. 3トレンチ設定前状況(南から)



5. 3トレンチ北側南壁土層断面(北から)



6. 3トレンチ中央南壁土層断面(北から)



7. 3トレンチ南側南壁土層断面(北から)



1. IV 群系円筒埴輪



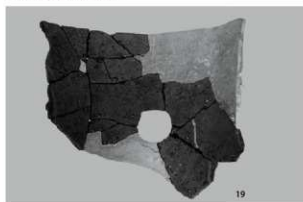
2. IV 群系円筒埴輪



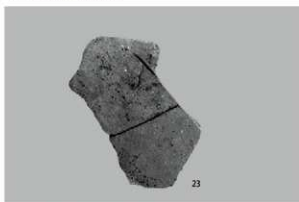
3. IV 群系円筒埴輪



4. IV 群系円筒埴輪



5. V 群系円筒埴輪



6. V 群系円筒埴輪口縁部ヘラ記号



7. V 群系円筒埴輪 (断続ナゲ技法 B)



8. 形象埴輪基部



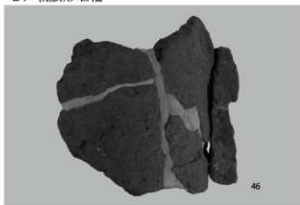
1. 朝顔形埴輪



2. 朝顔形埴輪



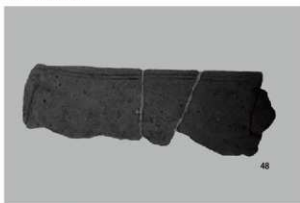
3. 盾形埴輪



4. 盾形埴輪



5. 盾形埴輪



6. 盾形埴輪



7. 盾形埴輪



8. 盾形埴輪



1. 蓋形埴輪



2. 蓋形埴輪



3. 蓋形埴輪



4. 蓋形埴輪



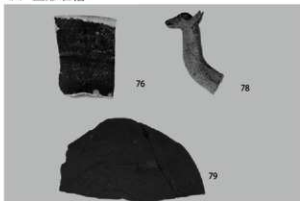
5. 蓋形埴輪



6. 蓋形埴輪



7. 須恵器台付壺



8. 須恵器



1. 天王塚古墳から大谷山22号墳を望む(前方部・東から)



2. 伐採前状況(後円部・西から)



3. 墳丘全景(前方部・西から)



1. 1トレンチ完掘状況 (断割り後)



2. 1トレンチ第2段斜面検出状況 (東から)



3. 1トレンチ第2段斜面土層断面 (北東から)



4. 1トレンチ墳丘掘土層断面 (北東から)



5. 1トレンチ第1段斜面中岩盤層検出状況 (北東から)



1. 1トレンチ第1段斜面断割り状況 (東から)



2. 1トレンチ第2段斜面断割り状況 (東から)



3. 1トレンチ墳丘裾埋設管検出状況 (北東から)



4. 2トレンチ調査前状況 (西から)



5. 2トレンチ第1段平坦面検出状況 (西から)



6. 2トレンチ墳丘検出状況 (西から)



1. 2トレンチ断割り後完掘状況 (西から)



2. 2トレンチ第1段斜面土層断面 (南から)



3. 2トレンチ墳丘掘擾乱状況 (南から)



4. 2トレンチ第2段断割り状況 (西から)



5. 2トレンチ第2段断割り状況 (南西から)



1. 3トレンチ断割り後完掘状況 (南から)



2. 3トレンチ墳丘裾遺物出土状況 (南から)



3. 3トレンチ関西大学トレンチ検出状況 (東から)



4. 3トレンチ第2段断ち割り状況 (西から)



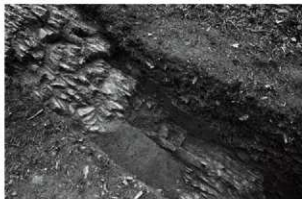
5. 3トレンチ墳丘裾断ち割り状況 (南西から)



1. 2 トレンチ及び4 トレンチ完掘状況 (西から)



2. 4 トレンチ完掘状況 (西から)



3. 4 トレンチ墳丘裾検出状況 (北から)



4. 4 トレンチ墳丘裾土層断面 (北から)



5. 天王塚古墳出土遺物

報告書抄録

ふりがな	おおたにやま22ごうふん、てんのうづかごふん -とくべつしせきいむせせんづかごふんでんづいかしていにともなうはつくちようきほうこくしょ							
書名	大谷山22号墳、天王塚古墳							
副書名	- 特別史跡岩橋千塚古墳群追加指定に伴う発掘調査報告書 -							
編著者名	黒石哲夫・田中元浩・土地舞・山本光俊							
編集機関	和歌山県教育委員会							
所在地	〒640-8585 和歌山県和歌山市小松原通一丁目1番地 In073-441-3731							
発行年月日	平成28年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大谷山22号墳	和歌山市岩橋・嶋神	3020150	185-97	34° 13' 37.9 *	135° 13' 10.8 *	H27.1.23~ H27.3.30	約59㎡	確認調査
天王塚古墳	和歌山市下和佐・西	3020150	185-562	34° 13' 24.1 *	135° 14' 16.5 *	H27.4.30~ H27.11.23	約60㎡	確認調査
ふりがな 所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大谷山22号墳	古墳	古墳時代	前方後円墳 (墳丘、基壇)	須恵器、土師器、普通円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪、弥生土器		全長約80m、墳長約67.5m、盾形基壇上に2段築成の墳丘構造。北側くびれ部に造出が付く可能性。基壇テラス等で環立埴輪列を検出。		
天王塚古墳	古墳	古墳時代	前方後円墳 (墳丘)	弥生土器、石器、須恵器		墳長約88mの前方後円墳、後円部2段以上、前方部2段築成の墳丘構造をもつ。		
要約	<p>大谷山22号墳では、前方部、北側くびれ部、後円部に各1トレンチ設定し調査を実施した。全てのトレンチで墳丘裾及びテラス面、環立埴輪列を確認し、全長約80m、墳長約67.5mの前方後円墳で、盾形基壇の上に2段築成の墳丘があることが確認された。出土遺物は、須恵器、土師器、円筒形埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪が確認された。</p> <p>天王塚古墳では、後円部、前方部及びくびれ部の墳丘裾を確認した。墳長88.0mの前方後円墳であり、墳丘裾部では岩橋千塚古墳群中で最大規模の前方後円墳として位置づけられる。後円部の規模は、直径約44.0~46.0mに復元できる。支室の高さ約5.9mを誇る横穴式石室を内部主体に持つため、後円部は壁高な立面形を示す。前方部は幅約48.0mに復元できる。段階は後円部は2段以上、前方部は2段となる。</p> <p>墳丘構築法は、後円部及び前方部は1段目テラスまでを地山及び地山岩盤層を削り出し墳丘とし、2段目以上を盛土により墳丘を築造する。後円部の墳丘構造と横穴式石室を比較すると、支室奥壁の石階付近までは、地山岩盤層を掘り込む事により利用し構築されたと考えられ、支室以上は盛土により構築されたと考えられる。</p>							

大谷山 22 号墳、天王塚古墳
-特別史跡岩橋千塚古墳群追加指定に伴う発掘調査報告書-

発行日 平成 28 年 3 月 31 日

編集・発行 和歌山県教育委員会

和歌山市小松原通一丁目 1 番地

印刷 株式会社おかだプリント